



創立40周年記念誌



氷ノ山

もくじ

兵庫労山結成40周年記念誌の発行に寄せて	1
各分野別のまとめ	
山行教育活動	3
六甲全山縦走	4
六甲山タイムトライアル	7
兵庫の山々いっせい登山の取り組み	8
海外登山	9
県連盟内における死亡事故	14
自然保護活動	20
冒険学校の取り組み	28
障害者登山の歩み	32
女性と登山	33
兵庫労山と国民平和大行進	38
阪神・淡路大震災	39
兵庫労山40周年記念行事について	42
連盟創設前史と創設のころ	45
組織の消長	53
兵庫県勤労者山岳連盟 40年の歩み	54
歴代役員名簿	64
加盟山岳会一覧表	65

表紙の絵「氷ノ山」
自由美術協会 吉見 敏治 氏作

兵庫労山結成40周年記念誌の発行に寄せて

会 長 玉井進吾郎

兵庫労山は昨年の4月に結成40周年を迎えました。この度、40周年記念事業の最後となる「兵庫労山結成40周年記念誌」が発行されました。兵庫労山では初めての記念誌であり、大変意義深いものです。先輩たちが40年前に兵庫労山の礎を築き、兵庫の地に働く者の立場に立った新しい登山運動を営々と広めて来た活動の一端が綴られています。40年の「兵庫労山の歩み」を今、兵庫労山に集まって山に登り、登山を広める活動を行なっている仲間達に知っていただきたいと思います。現在では考えられませんが、40年前はほとんどの会員が20歳から30歳前半の文字通り青年でした。今とは社会情勢、労働環境、余暇利用等々を単純に比べることは出来ないと思いますが、この記念誌が現在山の会の運営で悩みながらも頑張っている仲間たちの活動に少しでも参考になれば幸甚です。

1966年4月、西宮、尼崎、宝塚そして神戸の4つの勤労者山岳会、250名の会員が東京、大阪に次ぐ地方連盟としては3番目の兵庫県勤労者山岳連盟を結成しました。現在の兵庫労山は49の山の会、ハイキングクラブで構成されており、会員は約2500名になっています。

結成当時は山の良さ、素晴らしさ、自然の美しさを会員が自分たちの周りの人たちに呼び掛けて山行を行なうという会の基礎作りが中心の活動でした。また、登山をすること、登山をする権利は憲法に保障された人間の生存権の一つであるということを進歩的な弁護士先生達から学びました。ここ最近はこのようなことを勉強して自らを高め律していくことが少なくなったことは大変残念なことです。当時の兵庫労山の方針をひとことと言えば「登山者の社会的使命をしっかりと自覚して、全ての登山愛好者、自然に親しみたいと願っている人々たちの要求に応える活動を何より重視する観点を確立し、具体的には「登山者は緑の番人でなければならない」との自覚にもとづく自然を守る運動、老人、婦人、子供、障害者の人たちに登山の楽しさを味わってもらう活動、毎月きちりした市民ハイキングを実施、季節ごとの登山バスの実施、そして一般の愛好者を対象にした登山講座、登山教室の実施などの活動に取り組む」ということでした。

さて、兵庫労山では早くから20労山1000名という組織の拡大目標を掲げて来ましたが、この目標は1974年に達成されましたが、これは単に山登りだけの活動で実現したわけではありません。1971年1月、県連登山学校の講師から「山に登っておられるあなた方は、山の中で行なわれている自然破壊を見てどう思っておられるのか、一度聞いて見たかった」と言われたことに大きなショックを受けました。県連盟では六甲山の河川の汚濁が大きな問題となっており、前年から水質調査を始めたところでしたが、まだ兵庫県全域の山岳自然にまでは目が向いていませんでした。さっそく、兵庫の山岳における自然破壊総点検の活動を取り組み、この中で氷ノ山が大幹線林道の建設によって危機に瀕していることを知りました。多田繁次さん等と「氷ノ山の自然を守る会」を結成し、県連盟を上げて氷ノ山の自然を守る大運動が始まりました。この運動の中で会員が1000名を達成したのでした。一方、六甲山系と河川の水質調査は四季を通じて行い、そのデータを元に神戸市と交渉し、六甲山上の建築物に第三次処理施設設置の公害防止協定を締結させました。

1978年10月22日は「六甲山からゴミを一掃する運動」が始まった歴史的な日となりました。8月を除く毎月1回統一行動として全ての会が六甲山のハイキングコースを受け持ってゴミ一掃の活動を行いました。六甲山はこの運動によって見違えるように綺麗になりました。この取り組みの広がりの中で1979年末に会員が2000名を突破しました。これらの自然保護活動によって兵庫労山が兵庫県民から一定の社会的な認知を受けることになり、運動の成果が労山の会員拡大ともなって評価されたと考えられます。氷ノ山を守り、六甲山を甦らせたことに私達はもっと自信を持って良いのではないのでしょうか？ 私たちがこの運動を行なわなかったらどうなっていたのでしょうか？ 氷ノ山は大幹線林道で無残な姿、六甲山はゴミ溜めとなっていたことに疑う余地はなかったと思います。

次に登山を広め、仲間を増やす活動としては常に社会的に弱者の立場にあるお年寄り、女性、子供たち、障害者の方々に手を差し伸べ、自然の素晴らしさを知ってもらうことでした。1975年に創立された西宮明昭山の会はまさに時代の先取りであり、今では兵庫労山の3分の1に迫る700名を擁する全国有数のハイキングクラブになっています。また、女性だけのクラブも組織され自立した女性がアルプスを闊歩し、クライミングをしている姿はもう珍しくありません。さて、子供たちはいつも社会の縮図のような立場に置かれており、未来への希望と裏腹に大きな不安に襲われています。兵庫労山では1976年から子供のための冒険学校を組織し活動を展開してきました。残念ながら現在県連規模では取り組めていません。今後の課題の一つとなっています。障害者登山も1976年から取り組みを始めて来ました。2003年には視覚障害者の会「ハイキングクラブ・カメ2003」が組織されるに至っています。兵庫労山が大きな組織になって来たのは華やかな海外登山やクライミングによってではありませんでした。全ての登山愛好者、自然に親しみたいと願っている人々たちの要求に愚直に応える活動によって成しえたものでした。

最後に労山の設立目的の一つであった「山の遭難を無くする」ことはまだ実現していません。残念ながら兵庫労山自らが多くの遭難事故を起こし、39名の仲間が遭難で亡くなっています。ここに亡くなられた故人のご冥福をお祈りします。最近は中高年者の遭難が多く社会問題にすらなっており、その対策が兵庫労山にも求められています。

世界的に森林伐採、砂漠化が大きな問題となっていますが、ここ六甲山や氷ノ山を始めとする但馬の山々は緑豊かな森に包まれています。私達は六甲山や但馬の山々の自然を守って来た自信を持って言えると思います。40年の兵庫労山の活動を振り返り、県民とともに兵庫の地に登山を広めて来たことに誇りを感じています。この記念誌を一里塚としてさらに21世紀を歩んで行くではありませんか。



兵庫労山の山行教育活動

1966年連盟は結成されたが、山行技術面ではその2年半前に結成された西宮労山の経験と、直前に誕生した尼崎、宝塚、神戸の各労山の個人の力に頼るしかなかった。そこで連盟は生まれたばかりのこの年の11月に富士山で開かれた第1回全国登山学校に10名の代表を派遣し、登山技術の習得を図った。この受講生が講師となって、翌1967年3月には氷ノ山で冬山学校を取り組んでいる。そして早くも5月にはRCT講習会、6月には実技と理論の登山学校がとりくまれている。さらにこの年の11月からは各会のリーダー養成と交流を目的に山行技術面を中心とした第1回県連登山学校が開催された。

第3回以降の県連登山学校は、労山運動を前進させる広い視野を持った活動家の養成に重点が置かれ、思想と理論面の強化を図り、登山史、民主スポーツ運動、権利としてのスポーツなどの講座が中心となっていった。これば「**労山学校**」を経て現在の「**運営委員養成セミナー**」に引き継がれている。

山行技術面では連盟創立以来、毎年のように岩登り講習会や冰雪技術講習会、救急法・搬出法講習会などの各種講習会や合宿が取り組まれており、これは現在まで引き継がれている。

1974年には第1期県連リーダー学校が取り組まれ、理論・技術面でのリーダー養成が系統的に図られることとなったが、1976年3月の第3期リーダー学校での奥穂高岳口バの耳遭難によって中断される。相前後して「**岩登りテキスト(案)**」の作成とともに初級岩登り教室が系統的に取り組まれ、終了山行として剣岳三ノ窓合宿が取り組まれるようになった。

1977年にはこの岩登り教室を含めて教育体系の確立が図られ、初級岩登り教室で基礎的な岩登りの理論と技術を学んだ後、県連登山学校へ進んで理論面の学習をし、その上で県連中級登山学校に進んで積雪期の縦走の知識と技術を学ぶ、というものであった。

1979年には、中断されていたリーダー学校を第4回中級登山学校として再開した。

これ以降、初級岩登り教室と中級登山学校は系統的に取り組まれ、歴史を重ねて多くの生徒・活動家を育てていくことになる。あわせて冬山入山前体力評価基準を設定して合同トレーニングを実施するなど、技術・体力の向上にも努めた。又日常トレーニングの検証の場として1983年からは各会対抗駅伝大会を実施したが1994年の第10回で終わっている。

1991年10月の第27期まで続いた初級岩登り教室は翌1992年からはロッククライミングスクールに名称を変更した。フリークライミング熱の高まりの中で、1999年には第1回インドクライミングスクールも取り組まれ、2000年の新日本スポーツ連盟によるクライミングコンペを主管した。

ハイキング層の要求の高まりに応じて、ハイキングリーダーを育てるため、1986年からはハイキングリーダー講座を取り組み、1991年からは雪山ハイキング講座も取り組むようになっている。また、1983年から始まった主婦のためのハイキング講座からはHCあじさい、グループてくてく、ハイキングクラブあすなる、ハイキングクラブ徒歩徒歩が生まれている。

多発する遭難事故に対して、1995年7月1日に長年の念願であった「**兵庫労山救助隊**」が結成された。

1997年7月には六甲山で行方不明になったハイカーを発見救出することが出来た。又2007年3月の氷ノ山不動沢転落事故では、救出するまでには至らなかったが、事故者(遺体)を発見し搬出しました。

救助隊の役割は「**早期発見、早期社会復帰**」であり、緊急連絡体制、救助搬出の知識・技術の向上を図るため、全国連盟、近畿ブロックの講習会への参加や、定期的な訓練を実施している。(安留)

六甲全山縦走

県連発足の年にスタート

40周年を迎えての第41回六甲全山縦走大会は、大きな転機を迎えた。これまで長く続いた同一パターンが大きく変更された。すなわち、開催期日が12月第1日曜日から3月に変更、コースが神戸市に準じたコースに変更、飲食のサポートが全廃になった、などである。

県連の全山縦走大会は、県連結成の年、1966年12月に早くも第1回が開催された。それ以来、基本的には、雨の日も雪の日も行われてきた。中止は第4回だけで、これは強い雨のため中止になった。それまで全山縦走は、山岳会が小規模に自主的に、または強力な山岳会のある特定の大きな職場がまれに行うに過ぎず、一般登山者に開かれた、だれでも参加できる大規模な行事はなかった。県連の大会が初めてである。

この全山縦走大会の目的は、各会の会員の交流をはかるとともに、一般の登山愛好者に参加する機会を提供するとともに、日ごろ鍛えたトレーニングの成果を試す機会ともする、ということにあった。そのため、登山靴をはいたり、重装備で歩く参加者もあった。当時はもちろん神戸市もまだ行っておらず、全山縦走大会は県連が草分けであった。

第1回は、1966年12月4日、参加者は62名、サポーターが20名、合計82名で行われた。県連の人員が約200名の時代である。参加者の中には、県連外の登山グループも含まれている。

はじめの頃はほんまの“全山”縦走！

特筆すべきは、この頃から数年間はスタートは塩屋、あの荒れた感じの高倉山の縦走路も健在、萩の寺から高取山に登り、須磨アルプスも通る加藤文太郎の時代からの伝統コースそのものであったことである。最初はタイムリミットも設けず、最後のゴールは11時を大きく上まわり、サポートのメンバーが終電で家に帰れるかどうか、という有り様になった。さすがに安全上からも、次回からタイムリミットを設けるようになった。参加者も、サポーターも皆若い。熱気あふれる雰囲気であった。その後、県連組織も大きくなり、また評判が高くなったのか、1973年(第8回)以後は参加者が大きく増え始めた。1981年から1994年ごろまでは天候の影響により変動があるが、申込者が1500人から2000人を上下していた。申込者の最高は1986年の2089人、参加者の最高は1942人である。しかしその間、まずスタートの塩屋が、住民にとって早朝からの騒音公害ということで通れなくなり、神戸市の海の埋め立ての材料として高倉山が削られることにより、また萩の寺も通過を断られ、やむなくコースを変更せざるを得なくなった。塩屋は須磨浦公園に変わり、須磨アルプスは参加者が増え続けて多人数ではコースが危険と、高倉山と高取山は大きく迂回、六甲の修了試験といわれたコースが軟弱になって魅力が減ったことは否めない。

その間、1995年(第30回)からは東コースをつくり、1997年(第32回)からは西コースを追加するなどの工夫も行われている。また第20回(1985.12.1)、第25回(1990.12.2)、第30回(1995.12.3)には、記念バッジが作られている。

起死回生の道は？

しかし1995年以後参加者は徐々に減り始める。1975年から神戸市主催の神戸市六甲全山縦走市民大会が始まり、第1回は参加者1560名、完走率83.2%であったが、参加者が急速に増え3000人を越えるようになったので、年2回に分けての開催となっている。

なぜ減少したのか、詳細な分析を行わないと分からないが、神戸市主催の全縦と時期が接近し競合していること、宣伝力が弱いこと、神戸市のコースに比べても本来の全縦コースとしてはあまりにもカット・迂回があり魅力が薄いこと、その他記念品、参加費の違いなどが挙げられる。また、われわれの会を見ても分かるが、常連参加者(レピーター)が高齢になって参加しなくなったのに対して、元気な新会員が少ないことも考えられる。いずれにせよ、各会の会員が高齢化していることが原因の一つになっていないだろうか。いずれにせよ、これまでの経験でも大勢の方が活気があり、励みになるのは事実である。

それにもかかわらず、会によっては、会員が多く参加し、また会外から大勢の参加者を得た会もあり、全縦を楽しんで待つような元気に活躍する会員の多寡や、ふだんの会外との結び付きの広さがものを云っているのであろう。全縦の成功も結局、各会が生き生きと活動し、会員を広げるかどうかにかかっているのである。

(原水)



六甲全縦参加者数

回数	年	月	日	申込				参加者(出走)				完走			
				全縦	西六甲	東六甲	計	全縦	西六甲	東六甲	計	全縦	西六甲	東六甲	計
1	1966	12	4				0	62			62	53			53
2	1967	12	3				0	125			125	101			101
3	1968	12	1				0	143			143	121			121
4	1969	12	7	雨天中止			0				0				0
5	1970	12	6				0	156			156	89			89
6	1971	12	5				0	235			235	166			166
7	1972	12	3				0	219			219	141			141
8	1973	12	2				0	405			405	297			297
9	1974	12	1				0	435			435	351			351
10	1975	11	30				0	701			701	576			576
11	1976	11	28				0	823			823	687			687
12	1977	12	4	1,072			1,072	940			940	718			718
13	1978	12	3	1,061			1,061	930			930	819			819
14	1979	12	2	1,389			1,389	1,393			1,393	1,104			1,104
15	1980	12	7	1,550			1,550	1,378			1,378	1,277			1,277
16	1981	12	6				0	1,839			1,839	1,644			1,644
17	1982	12	5	1,834			1,834	1,942			1,942	1,521			1,521
18	1983	12	4				0	1,645			1,645	1,597			1,597
19	1984	12	2	2,068			2,068	1,862			1,862	1,684			1,684
20	1985	12	1				0	1,810			1,810	1,584			1,584
21	1986	12	7	2,089			2,089	1,851			1,851	1,667			1,667
22	1987	12	6	1,637			1,637	1,456			1,456	1,183			1,183
23	1988	12	4	1,750			1,750	1,634			1,634	1,495			1,495
24	1989	12	3	1,802			1,802	1,626			1,626	1,555			1,555
25	1990	12	2	1,768			1,768	1,574			1,574	1,476			1,476
26	1991	12	1	1,630			1,630	1,519			1,519	1,413			1,413
27	1992	12	6	1,881			1,881	1,646			1,646	1,546			1,546
28	1993	12	5	1,940			1,940	1,697			1,697	1,547			1,547
29	1994	12	4	1,874			1,874	1,665			1,665	1,493			1,493
30	1995	12	3	1,499		116	1,615	1,349		105	1,454	1,216		105	1,321
31	1996	12	1	1,464		201	1,665	1,275		148	1,423	1,154		143	1,297
32	1997	12	7				0	1,401	83	138	1,622	1,006	59	90	1,155
33	1998	12	6	1,227	46	162	1,435	1,117	43	144	1,304	1,026	41	141	1,208
34	1999	12	5	1,191	80	178	1,449	1,027	68	149	1,244	951	66	144	1,161
35	2000	12	3	1,084	60	155	1,299	970	57	138	1,165	893	56	129	1,078
36	2001	12	2	976	52	151	1,179	867	41	140	1,048	799	41	127	967
37	2002	12	1	977	41	196	1,214	902	34	162	1,098	803	34	157	994
38	2003	12	7	899	55	184	1,138	795	48	157	1,000	726	48	151	925
39	2004	12	5	825		200	1,025	635		130	765	564		122	686
40	2005	12	4	818		201	1,019	728		151	879	405		90	495
41	2007	3	11	588		206	794	494		179	673	349		167	516

第20回(1985.12.1)第25回(1990.12.2)第30回(1995.12.3)で記念バッチ作成

第30回から東コース追加 第32回から西コースも追加

第26回(1991.12.1)にはこの年の平和行進通し行進者 錦織さんも完走。

六甲山タイムトライアル

1983年4月3日、春を体いっぱい感じる暖かい陽ざしの中、記念すべき第1回六甲山全山縦走タイムトライアルが250名の参加で行なわれました。(これは兵庫労山発行の「事務連絡 135」の報告の出だしである)

1966年に兵庫県連が結成されて以来、毎年12月第1日曜日に六甲全縦が取り組まれて来ました。全縦は1980年になると参加者が2000名規模になるという兵庫労山の最大のイベントになっていた。当時はランニングブームが広がっており、単なる平地を走るだけでは飽き足らなく山野を走るクロスカントリーに人気も出始めていた。労山の全縦参加者からも縦走のタイムや順位を尋ねられることがしばしばあった。また、労山は全縦を山行活動のトレーニングの一環としても位置づけていた。1983年になって兵庫県連はこのような愛好者の要求にかなない、自らのトレーニングの場とも考え、タイムを競う全縦を新たに取り組むことにした。取り組み期間がわずか1ヶ月という短期間にも関わらず、兵庫県内各地や遠く鎌倉からの参加者もあった。タイムは男子が爲本寿さんの5時間24分、女子が渡辺喜美香さんの8時間15分であった。



四ノ岡六甲全山縦走タイム・トライアルのスタートの瞬間

六甲山タイムトライアルは第3回から3月最後の日曜日実施として毎年開催された。参加者も第3回で500名を越えたが、大会運営上700名に募集を制限した。

ランニング雑誌の「ランナーズ」や山岳雑誌「山と溪谷」の取材もあって全国各地から参加者が集

まった。タイムトライアルは労山の全縦コースと違って須磨アルプス、高取山を含むもので累計標高差が3000mとも言われる難コースとして紹介された。

これまでの最高タイムは男子が第8回(1990年)の4時間13分(山梨県の千野香さん)、女子は第9回の5時間9分(千葉県の中川シズ子さん)である。

1995年の第13回は申込みが前年にすでに終わっていたが、1月17日の阪神淡路大震災によって中止を余儀なくされた。この時の参加費は六甲山の登山道修復等の費用として神戸市等の自治体に寄付させていただいた。翌1996年には第14回を実施したが、1997年に市街地の自治会が反対されたためタイムトライアルは中止となった。

(玉井)

第1回の参加者からの便り

拝啓

タイムトライアルの成績表拝受けました。ご忙な方々がこんなにくわしく丁寧な作業をしてくださる頭がさかします。知人の名前も何人か見つかって興味深々拝見いたしました。

また、4月3日当日には、スターやチェックポイントサポート、ゴールの記録記入、ぜんざいなどのサービスの爲に長時間お世話下さり大変有難うございました。

お陰様で、参加者としてお楽しみは安心して全力を發揮できました。まさか私が6時間58分で完走できるとは思いませんでした。何か大きな未知なるものへ挑戦し、それをやりとった感動が今でも残っています。

職場の同僚の中にも来年のタイムトライアルには参加したい人もいますし、私もぜひ参加し記録を更新したいと思っています。お世話なされる方は大変でしょうが、来年も4月上旬にタイムトライアルを実施して下さる様、お礼かたがたお願い申し上げます。

敬具

神吉美敏(ゼッケン267)

兵庫の山々いっせい登山の取り組み

1990年 氷ノ山の自然を守る運動 が一応終結した頃から「兵庫の山々へ登りたい」「氷ノ山以外の兵庫の山々はどうなっているの(自然保護の面からも)」「もっと兵庫の山々を知ろう」という声があがった。

また、その前に「兵庫百山」のガイドブックを作ろうと 各会では、担当をきめ、調査してきた計かもあった。

そこで、兵庫労山25周年記念行事の一環として、兵庫労山あげで 兵庫県内の山々へ登る 取り組みをはじめた。

相前後して、無線の重要性もあり、資格習得の講習会も開催していたが、その中心のメンバーの協力を得て、無線を利用して、リアルタイムに各会の登山の実情、(会名・どこの山・何人で等)を交信することにより、連盟の仲間の、兵庫の山々へ取り組む心意気をお互いを感じようとの目的で取り組んだ。(第1回 1991.5.18~19)

これらを基礎に、兵庫の山々のガイドブックをつくろうと、地図を含めた資料と報告書の提出を求めたが集まりきらず実現できなかった。

そして、尼崎山の会の紹介で、播磨地域(当時の宍粟郡一宮町)千町ヶ峰の麓に自費でキャンプ場を設立された「こぶしの村」を知り、そこに現地本部を置いた。

尼崎山の会は、この地域に道標を立てるなど、積極的に登山の案内活動を展開していた。

この千町ヶ峰から、兵庫の山々に登っている兵庫労山の各パーティーに「ハローQQ・QQ」と交信し、無線を通じて、連帯と交流を深めてきた。

前夜、現地本部こぶしの村に集まった会と、田中先生(こぶしの村設立者 故人)の考えのすばらしさに共鳴し、参加者の相互の交流も深めた。しかし、千町ヶ峰の山頂付近が笹の繁殖により無線運用の環境に適さなくなり、2000年(9回)から、無線本部を、少し東の段ヶ峰に変更した。2004年(13回)からは、携帯電話の普及により無線同様運用可能山域の確認も行った。

各会では、氷ノ山にこだわりを持って取り組む会や、新しい山を求めたり、登山バスの形で取り組む会もあったが、交通が不便なため、県境とくに京都府との県境の山や県北への取り組みが弱いものだった。その中でメラピークKOBEが意欲的にこれらの山々へ取り組んだ。

しかし、連盟の宣伝不足もあり、各会のこの行事に取り組む会が次第に少なくなってきたため、2005年(14回)をもって休止している。

この行事に大きくサポートしていただいた田中哲雄先生が、2002年5月豪雨の中、こぶしの村の安否を確認するこの地へ出かける途中、交通事故に遭い急逝されたことは慙愧に堪えない。心からご冥福をお祈りします。こぶしの村は、その後、ご家族や常連愛好者により、会員制キャンプ場として、新しい道を進んでいる。兵庫労山も賛助会員として、わずかながら協力をする。

この「こぶしの村」は、車がなければ、不便なところだが、まだまだ、自然の豊かなところである。連盟の仲間の皆さんにも、播州高原山域の登山ハイキングのベースキャンプとして、また、講習会の実技の会場として、是非利用していただきたい。

(喜多)



海外登山

兵庫労山は1966年の結成以来、兵庫県内をはじめ近畿周辺さらには日本アルプスなどで登山やハイキングを楽しみ、県民に広める活動を地道に行なって来ました。当時はヒマラヤ登山等は夢のまた夢でもありました。1972年に全国連盟が全国の労山会員に呼び掛け100余名がヨーロッパアルプスを登る一大イベントがありました。兵庫からも10名ほどの会員が参加しモンブランやマッターホルンなどを登りました。

兵庫労山は1975年の第10回臨時総会で結成10周年記念事業として長野県労山と合同で初めてインドヒマラヤのナンダデビ峰に登山隊を送ることを決めました。1977年以後の兵庫県連と加盟山岳会が取り組んだ海外登山を報告します。

* 1977年日印合同ナンダデビ登山隊（7816m）

総隊長：武原 勉（48、兵庫労山）

隊長：森田稲吉郎（36、長野・上小労山）

副隊長兼登攀隊長：倉内司郎（35、西宮北口労山）

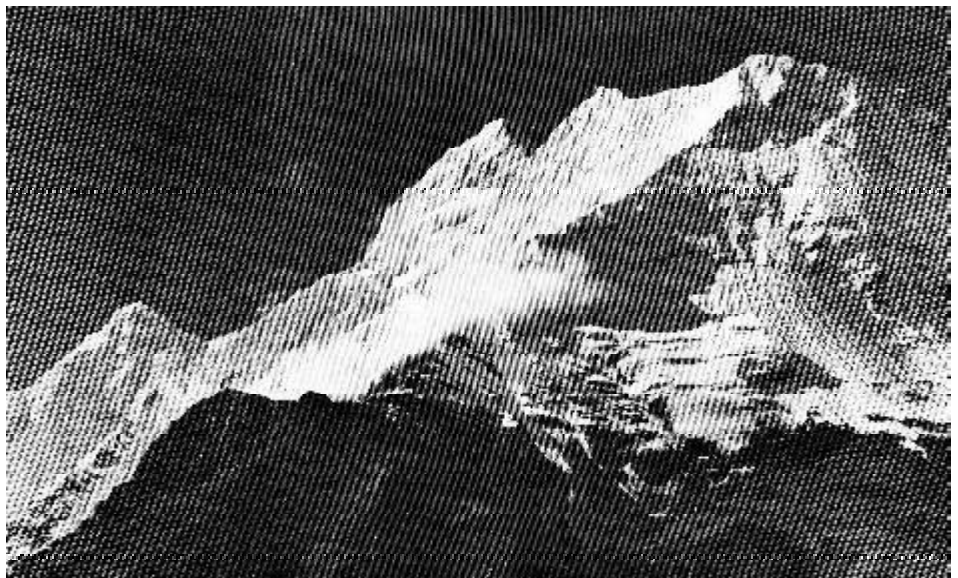
マネージャー：赤松 暁（36、神戸労山）

隊員：羽二生直人（30、北海道・札幌ピオレ山の会）、槌田 洋（27、大阪・吹田労山）、神津一男（30、長野・佐久アッセントクラブ）、太田正博（28、長野・上小労山）、小平忠美（24、長野・伊那山仲間）、村西豊克（32、西宮北口労山）、赤鹿克明（32、甲子園労山）、坂西美和子（31、西宮北口労山）、田淵常雄（29、東灘労山）、本部 肇（25、摩耶山友会）

インド側隊員4名

この登山は日本勤労者山岳連盟創立15周年記念事業として取り組まれたもので兵庫県連と長野県連が主管した。登山

隊の行動概要は1977年7月26日に先発が、8月5日に本隊が出国した。登山隊はインドで友好親善活動の後、9月2日からキャラバンを開始し8日にBCに到着した。その後約1ヶ月間登山活動を行なったが、ルート変更による装備不足や天候悪化等で登頂を断念した。



ナンダデビ

最高到達高度は10月2日のC 4 予定地6850mであった。登山隊は10月20日にニューデリーに帰着した。その後、登山隊の隊員を中心に12名がインドからの帰路ネパールを訪れ、ネパール警察登山探検財団チームとラムジュン(6983m)BCで合同訓練を行った。

なお、この登山隊を物心両面で支えるために兵庫県連を挙げてカンパ活動、カレンダー販売、隊員の家族支援活動を行なった。

* C B 1 2 女子登山隊 (インドヒマラヤ 6248m 初登頂)

隊長:吉本 満(30、須磨労山)

隊員:福隅さち子(29、山岳会ホワイトピーク)、足立寿子(26、逆瀬川労山)、吉田寛子(25、山の会かじか)、生駒隆子(24、山岳会ホワイトピーク)

この登山隊は県連で活動する5つの会の女性ばかりの有志で組織された。1979年7月26日に出国した、8月6日にキャラバンを開始し9日にBCを建設した。9日から登山活動を行い、18日に全員が登頂を果たした。9月3日に全員無事に帰国した。

* 1980年兵庫県勤労者山岳連盟日印友好シブリン登山隊

(インドヒマラヤ・ガンゴトリ山群 6543m)

隊長:倉内司郎(38、西宮北口労山)

副隊長兼登攀隊長:小林孝雄(32、西神戸山の会)

隊員:猪原絹子(33、甲山労山)、栢 正頼(32、逆瀬川労山)、井上義行(31、武庫労山)、足立寿子(27、逆瀬川労山)、山崎勝治(27、甲山労山)、岩佐正敏(26、須磨労山)、西江博司(26、山岳会ホワイトピーク)、峯崎和子(26、武庫労山)、井上幸隆(23、山の会かじか)

この登山隊は個人が登山許可を取得し、有志に呼びかけて組織され兵庫労山が後援をした。3年前のナンダデビ登山隊の総括が出来ていなかったためである。1980年5月10日に先発、18日に本隊が出国した。23日からキャラバンを開始し、6月1日全員がBCに入った。20日に小林副隊長と井上義、西江、井上幸の3隊員が登頂に成功した。これは外国人としての初登頂であった。7月4日に帰国した。登山隊は登山の前後にバレーボールを寄贈する等の友好親善活動も行なった。また、隊長と足立隊員は直前に休暇が不承認とされ、参加できなくなった。

* 1982年須磨・神戸中央合同チュルー・ウエスト登山隊 (ネパールヒマラヤ 6612m)

隊長:三宅静夫(33)

隊員:近藤義夫(26、神戸中央労山)、中尾康彦(24)、西川則子(神戸中央労山)、永峯奈美子、畑美恵子(神戸中央労山)

この登山隊は須磨労山の労山加盟10周年記念事業として取り組まれた。3月21日に神戸みなと労山のパーティーが八ヶ岳中岳沢で雪崩に遭遇し11名が死亡する遭難が起こった。兵庫県連ではこの遭難を受けて山行を自粛し、再開に向けて山行の安全点検を行なっている最中であった。

4月9日に出国し、登山活動を行なったものの天候と隊員の力量不足でチュルー・ウエストは断念

した。替わりに同山塊のグサンピーク(6511m)を5月1日から4日までに全員が登頂することが出来た。

* 1982年ネパール・兵庫合同キャリオルン登山隊(ネパールヒマラヤ・ロールワリン山群(6681m)初登頂)

総隊長:倉内司郎(41、西宮北口労山)

隊長:Yogendra Thapa(37)

マネージャー: Babu Ram Pur(38)

日本側リーダー:井上義行(34、武庫労山)

隊員:藤井宗平(30、神戸港山の会)、岩佐正敏(28、須磨労山)、西江博司(28、山岳会ホワイトピーク)、中原万亀男(26、東灘労山)、中尾康彦(24、須磨労山)、矢田久美(31、山岳会ホワイトピーク)、西村牧代(26、山歩溪山岳会)

ネパール側6名

この登山はネパール警察登山探検財団から合同登山の申し出を受けて実施された。キャリオルン峰は当時ネパールが解禁しているリストの中で「ネパール隊もしくはネパール人を3人以上含んだ外国隊にのみ許可される」Aグループに属する数少ない未踏峰であった。

1982年9月17日、本隊がネパールのカトマンズに到着した。20日、キャラバンを開始し、28日BCに入る。当初予定していた西壁ルートが困難なためルートを北面からぐるりと一周し、東面から登ることにした。10月1日より登山活動を開始し、31日と11月1日に渡り全員が登頂を果たすことができた。11月11日と13日に全員帰国した。

* 1985年兵庫ケダルナート登山隊(インドヒマラヤ・ガンゴトリ山群 6968m)

隊長:岩佐正敏(31)

隊員:狩野千之(41)、平尾一幸(32)、馬庭節男(32、伊丹労山)、吉谷隆男(30)、斉藤茂樹(29、山の会アルプ)

この登山隊は須磨労山を主体として構成された。岩と氷が張り付いたケダルナートの南壁を登るという意欲的な登山隊であった。1985年9月7日に先発が、14日に本隊が出国した。17日からキャラバンを始め、21日BCを建設した。22日から登山活動を開始したが、10月8日雪崩によって斉藤隊員が行方不明となった。事故現場周辺を捜索したが、手掛かりもなく19日捜索を断念し、登山も中止となった。10月26日帰国した。

* 1990年兵庫ガンゴトリ峰登山隊(インドヒマラヤ・ガンゴトリ山群 6577m)

隊長:三宅静夫(42、山の会アルプ)

副隊長:馬庭節男(37、伊丹労山)

隊員:西村牧代(34、山歩溪山岳会)、三浦晴行(45、西宮北口労山)、川村隆志(43、アルペン芦山)、河尻重和(37、垂水労山)、宮本正宏(33、明石労山)、西中節子(42、摩耶山友会)、山崎智代(29、甲山労山)

この登山は兵庫労山創立25周年記念行事として取り組まれた。県連9つの会の有志9名で登山隊が組織された。1990年9月6日先発隊が、12日に本隊が出国した。14日にキャラバンが始まり、18日にBCに到着した。20日から登山活動を始め、10月3日に川村、宮本、西村の3隊員とコックのラックスマンが登頂に成功した。帰路IMFを訪問し、ヒマラヤの自然保護活動の一助としての寄付金を手渡した。10月14日、全員無事に帰国した。

* 1991年神戸中央ムルキラ登山隊 (インドヒマラヤ・セントラル ラホール山群 6517m)

隊長:近藤義夫(35)

隊員:久保 昌(38)、豊富葉子(28)、宮本正宏(36、明石労山)、清郷雅秋(34、明石労山)

この登山隊は神戸中央労山結成10周年行事として取り組まれたもので同会から分離独立した明石労山の仲間も参加した。1991年8月14日に出国した。23日キャラバンを開始し28日にBCに着いた。29日から登山活動を開始し、9月11日に宮本隊員とハイポーターのラックスマンが登頂した。なお、前日に頂上直下52mで近藤隊長が滑落、両足捻挫の事故があった。そのサポートもあって他の隊員の登頂はならなかった。9月25日に帰国した。

* 1991年神戸メラ・ピーク登山隊 (ネパールヒマラヤ・クーンブヒマール(6654m))

隊長:玉井進吾郎(49)

隊員:大塚大三(51)、井口恭光(50)、坂本雄次郎(48)、有元真理子(36)

この登山隊は旧大蔵省の出先の職場の山の会の有志が登山隊を組織した。同時にこの山にちなんで「メラピークK O B E」という会を結成し兵庫労山に加盟した。1991年9月20日に出国し、24日からキャラバンを始めた。29日にBCに入り、10月2日に大塚隊員を除く4名が登頂した。帰路ルクラからタンボチェまでトレッキングを行い、18日に帰国した。

* 1994年7月に兵庫労山RC研がアメリカ・ヨセミテでロッククライミング(Zodiac他)を行っている。この後県労山の中でもフリークライミングが広がり、海外でのクライミング活動が行なわれるようになった。

* 1994年神戸トウクチェピーク登山隊 (ネパールヒマラヤ・ダウラギリ山群 6920m)

隊長:玉井進吾郎(52)

隊員数:湯浅俊治(55、摩耶山友会)、朝日文雄(45、伊丹労山)、有元真理子(39)



トウクチェ・ピークをバックに

この登山隊はメラピークK O B Eが主体となって組織した。1994年9月3日に先発が、8日に本隊が出国した。なお、本隊は開港したばかりの関西空港発であった。14日にキャラバンを始め、25日にB Cに入った。26日から登山活動を始めて10月7日に隊長と朝日、有元の2 隊員およびとシェルパ1 名が登頂した。隊長は両手指及び足指に凍傷を負った。10月24日に全員帰国した。

* J W A F 横断山脈登山隊9 8 (中国四川省・蓮花夕照連山主峰 5704m 初登頂)

隊 長:山岡人志(39、はりま山岳会)

隊 員:近藤義夫(42、岩と雪の会こぶし)、白井良岳(26、神奈川・相模労山)

この登山隊は未知未踏の岩壁を求めオリジナリティーのあるクライミングを行った。1998年9月12日出国し、19日に外国人が初めて入ったというB Cに入った。30日と10月6日の2次に渡って全員が登頂した。10月15日に帰国した。

* プルダール(パキスタンヒマラヤ 520m)

隊 長:有元真理子(50)

隊 員:大杖哲司(50)、斉藤留美子(西宮労山)

国内登山でも休暇を取るのが一苦勞、ましてや1 ヲ月を越える海外登山などもってのほか、と言うご時世である。ところがメラピークK O B Eの2人と西宮労山の会員からなるこの登山隊は二週間でヒマラヤを登ろう!と計画を立てた。

2005年6月2日に出国し、パキスタンのラホールからイスラマバードに入る。カラコルムハイウェイを走り、8日にB Cに到着した。11日にハイキャンプからプルダール峰にアタックするべく出発したが、前夜の降雪で登頂を断念した。帰路、キルギットを経て中国国境のクンジュラブ峠まで足を伸ばし、18日に帰国した。

1995年の阪神淡路大震災以後は兵庫労山及び加盟各会での海外登山はほとんど取り組まれていない。労働条件の悪化で休暇取得が困難になったり、会員が高齢化して来た影響ではないかと考えられる。一方、全国連盟が主催する高所登山学校や公募登山隊に参加した会員は何人かはいるようである。中でも1989年の全国連盟第2回高所登山学校・ハンテングリ嶺(7010m(旧ソ連邦))登山隊に参加した山歩溪山岳会の西村牧代さん(33)は8月6日に登頂に成功した。なお、兵庫労山の会員で7000m峰のサミッターは現在でも西村さんだけである。

(玉井)

県連盟内における死亡事故

兵庫県勤労者山岳連盟内の死亡事故は創立以来40年間で、18件、35名に上る。その後の記念誌作成までの1年の間にも4件、4名の死亡事故が続き、2007年4月末現在で39名の仲間の尊い命が失われている。このほかにも傷害や後遺症を残す事故も少なくない。

この間の事故を見る限り、年齢、性別を問わず、季節を問わず、初心者ベテランを問わず、高山、岩登り、ハイキングを問わず事故は起きている。又その原因も転・滑落、雪崩、凍死、水死等多岐に渡っており、それも同じ様な事故を繰り返している。

同じような事故を繰り返さず、いつでも誰でもどこでも起こりうる事故を如何に回避するか、これまでの事故から学びとり伝えていく必要がある。詳細はそれぞれの事故報告書にあるが、その概略にふれてみる。

1 前穂高北尾根遭難事故

岩登り技術の訓練とリーダーの養成、加盟山岳会の親睦と交流を目的として、1973年10月5日(夜)～10日の予定で第2回兵庫県連盟合同合宿が取り組まれた。参加者12名。10月5日夜神戸発、6日上高地から涸沢へ、15:30BC、7日前夜来の雨で、予定の屏風岩登攀を中止し停滞。8日前々夜からの雨のため、予定の前穂東壁・四峰正面の登攀を変更して、前穂北尾根を5・6の科尔から前穂に向かうことになり、11:00、2パーティーに分かれて出発。11:40、4峰の登りで神戸労山の柳楽峰子さん(23)が約150m涸沢側に転落し全身打撲により即死。転落の瞬間は誰も目撃していないため直接原因は不明だが、浮石によるスリップか、手にした岩が崩れてバランスを崩したと推測された。県連盟結成7年目にして経験した初めての死亡事故であった。

2 武庫川渡渉訓練事故

芦屋勤労者山岳会が1975年8月に予定していた黒部・上の廊下遡行の渡渉訓練を武庫川において3人で行うことになり、7月20日23:11国鉄道場駅に到着。近くの広場で車中ビバーク。翌21日朝、合流するはずの1人が来ないので、2人で行く。最初の国鉄鉄橋下から渡渉を開始。道場駅から3つ目の鉄橋を過ぎ、6回目の渡渉地点においてリーダーの後に続いて泳いで深みを渡っていた淵上博さん(24)が力尽きて泳げなくなり、リーダーが助けようとしたがもがき合いながら沈んでいった。死因は急性心不全。

3 奥穂高岳・ロバの耳遭難事故

1976年3月17日(夜)～22日、県連盟第3期リーダー学校の終了山行として奥穂高から西穂高への縦走が取り組まれた。参加者は6名。17日夜大阪を夜行で出発、涸沢岳西尾根森林限界で幕営。翌19日朝6:10出発、11:30白出の科尔、14:00馬の背とロバの耳の科尔着。ロバの耳のトラバースにおいて1名がスリップ、引きずられた者と2名がザイルに宙吊りになる。その救出作業が夜に及び、ロバの耳を越えた地点でビバークとなる。テントの入ったザックはザイルに吊り下げられたままでこ

の日は回収できず、予備のテントは先行した1名がジャンダルムの基部ですでに幕営していたため、フライシートに着の身着のままのピバークとなり、翌20日朝西宮労山の安田勢喜さん(25)が凍死、ほかに4名が凍傷により手足の指を失う。

4 鹿島槍・赤岩尾根遭難事故

尼崎労山の春山合宿が1974年4月29日～5月6日後立山連峰周辺に取り組みられた。参加者は3隊で合計13名。そのうち赤岩尾根隊8名は5月1日夜大阪を出発、2日大谷原から高千穂平着BC設営。3日BCから鹿島槍往復で冷池山荘着。上田孝男さん(27)は布引岳から鹿島槍への途中で体調が悪くなり、アイゼンの一部を紛失。冷池山荘泊、上田さん嘔吐、おかゆを食べる。4日上田さんの体調回復、メンバーのアイゼンを借りる。7:10発～8:50高千穂平BC、雪上技術訓練の後テント撤収、13:30出発したが、14:20縦走隊と無線交信ができたためBCから800m下方に幕営、17:50全員が集結した。5日9:10出発、上田さんは6番目。9:40、遭難レリーフの手前で上田さんが西俣側にスリップ、一度はピッケルで停止するが、ピッケルを支点に立ち上がる時に再び左足がスリップ、標高差150mを滑落し頭部挫傷、口と鼻から出血多量、10:15呼吸・脈拍停止。死因は脳底骨折。

5 八ヶ岳遭難事故

神戸みなと労山は1981年度初級冬山教室の終了山行として雪上技術・雪上生活を実践するため、1982年3月19日(夜)～22日の日程で八ヶ岳山行を取り組んだ。参加者は13名。19日大阪を夜行で出発。翌日7:50美濃戸口発、雪が断続的に降る中を11:10赤岳鉱泉着、BC設営。13:00～15:00中山尾根北側斜面にて雪上訓練。21日4時起床、水気を含んだ重たい雪が降っていたため縦走を中止する。しばらく天気待ちをしていたが、みぞれが雪に変わってきたため、阿弥陀岳往復に計画変更、8:00出発、行者小屋を経て中岳沢に入る。9:35頃阿弥陀岳と中岳のコル直下150m付近を登行中、中岳側・阿弥陀岳側の両側斜面から雪崩が発生、神戸みなと労山パーティーを含む16名がまきこまれる。4名は救出されるが、みなと労山の新井良(62)、橋田孝弘(42)、安田憲市(32)、久保百合子(31)、権藤美恵子(28)門田幸治(28)、柳静子(27)、杉本悦子(25)、田中かおる(24)、田丸敦子(24)、沢田和史(21)さんの11名と他1名は沢筋を約200m流され50cmから4mの深さに埋没し、窒息死する。

6 五竜岳遠見尾根遭難事故

西宮労山創立20周年記念として北アルプスの全ルートを走破する計画が決定され、その一環として1983年8月12日(夜)～17日の後立山幕営縦走が取り組みられた。参加者4名。12日夜21:40神戸労山のバスに同乗して西宮北口を出発。13日朝松本で列車に乗り換え白馬駅～猿倉7:30出発～12:10白馬テント場着。テント設営後白馬岳往復。14日テント場発4:00～天狗山荘着6:25～唐松岳着10:10～五竜山荘テント場着13:05。テント設営後昼寝。19:00就寝。夜半雨。15日4:30起床外は濃いガス、台風6号の接近で天候の回復は望めないため遠見尾根から下山することになり、6:45出発。7:55大遠見を下った所のザレ場で2番目を歩いていた辻宗郎さん(45)がバランスを崩して滑落、約100m転落。救出作業の途中、14:30全身打撲により死亡。

7 南アルプス・赤石沢遭難事故

西宮北口労山例会として、1984年8月10日夜～14日の日程で南アルプス大井川源流の赤石沢遡行が計画された。メンバーはサブリーダーの熊田正さん(42)を含めて3名。10日夜大阪発、11日9:10榎島発、牛首峠～イワナ淵渡渉～二段ナメ滝～ニエ淵と遡行し14:50～15:10の休憩、15:30頃ニエ淵上部ネジレの滝左岸をラストで登攀中滑落。確保していたザイルで引き上げようとしたが引き上げられず、下流へ流して救出。心臓マッサージと人工呼吸を試みるが蘇生せず死亡。死因は心臓破裂。

8 東六甲縦走路転倒事故

甲山労山は1984年10月に一般募集での八ヶ岳登山バスを計画していたが、そのトレーニング山行として9月30日、東六甲縦走コースから六甲山への山行が取り組まれた。8:45阪急宝塚駅発、9:35塩尾寺着9:45発、10:45大谷乗越上部着11:00発、船坂峠から15分ほど過ぎたところで、突然会員の森井祖一さん(70)が倒れる。右後頭部に切り傷。メンバーの一人(医師)が脈拍、瞳孔を診るが反応なし。すぐに人工呼吸、心臓マッサージを試みるが、蘇生せず。死因は急性心不全。参加者18名中、森井さんは13番目を歩いていた。森井さんは7月に狭心症でドクターストップがかかっていたが、9月に解除され、トレーニングでの体調がよければ登山バスに参加するつもりであった。

9 鹿島槍遭難事故

宝塚山の会は1984年12月29日夜～1985年1月7日の日程で、後立山・爺ヶ岳～白馬岳縦走を計画した。参加者は藪内昭博(29)、足立寿子(31)、武本武久(31)、岡崎忠一(31)さんの4名。12月29日22:29大阪発、30日8:00扇沢発、14:45爺ヶ岳南尾根2,200m地点で幕営。31日8:00出発、9:35爺ヶ岳、11:05冷池山荘、13:40南峰下部到着、幕営。1月1日8:15出発、9:10南峰。キレットへのトラバースの途中に表層雪崩に巻き込まれたと推測され、全員東谷側に転落。10次に及ぶ捜索活動の結果、8～9月になってから大滝で全遺体を発見、収容した。

10 インド・ケダルナート峰遭難事故

1985年、須磨勤労者山岳会が中心となって「1985兵庫ケダルナート登山隊」が組織された。9月14日出国、10月16日登頂、27日帰国予定で参加者は須磨労山4名、伊丹労山1名、山の会アルプ1名の合計6名。9月7日先発隊が出発、インドヒマラヤ・ケダルナート峰(6,968m)登山が開始された。9月21日BC(4,150m)建設、26日から登山活動に入る。10月8日、IBC1直下の岩壁のレンゼを登攀中雪崩に襲われ一人はフィックスロープにユマールで止まったが、斉藤茂樹さん(29)は雪崩に巻き込まれ行方不明となる。以後18日まで捜索活動を続けるが、降雪・雪崩による二重遭難の危険性が高まってきたため捜索を断念した。斉藤さんは今もケダルナート氷河に眠っている。

11 西穂高岳独標遭難事故

1986年12月29日から1987年1月1日にかけて神戸勤労者山岳会の河岡邦彦さん(32)は元職場の同僚と2人で西穂高岳登山を計画した。12月29日車で神戸を出発、30日未明新穂高温泉着。ロープウェイを利用してこの日は西穂高岳山荘テント場に幕営。翌31日独標を経由して西穂高岳に向かっ

たところまでは確認されたが、以後行方不明となった。1月5日からの第1次捜索活動では発見できず、結局第5次捜索活動中の5月4日になって独標手前の通称お花畑で雪の中から発見された。この山行は日頃からあまり会活動に参加していない会員の無届による個人山行であった。

12 扇ノ山遭難事故

1994年8月13日から15日にかけて明石勤労者山岳会の野口浩二さん(29)は扇ノ山へ単独山行を取り組んだ。12日夜行で大阪を出発、翌13日浜坂からバスで温泉町田中へ、霧滝溪谷に入る。霧ヶ滝を見た後旧トロッコ道まで登りツエルトでビパーク。翌14日旧トロッコ道を西へ、扇ノ山を目指す。トンネルが土石で埋まっていたため高巻きをして再び6～7m下の旧トロッコ道に降りようとして墜落。肋骨と右足を骨折、沢の方へ移動しようとして滑落、岩に頭をぶつけて死亡したものと推測される。死因は頭蓋底骨折による即死。この山行は会へ計画書は出されていたが、個人山行であったことや野口さんが入会して2ヶ月と日も浅かったため、18日になってお母さんから捜索願が出されてからの捜索活動になった。単独山行のため実際の行動や事故の様子は推測するしかなかったため、捜索の範囲を確定するのに時間がかかり、19日から捜索活動を開始したものの発見は27日になってしまった。この事故を契機に翌年県連に救助隊が結成された。

13 氷ノ山遭難事故

淡路勤労者山岳会の梅田平(49)、池登俊明(53)、木田昭(61)さんの3名と南但山歩会の森岡信吾(42)、亀井典義(54)さんの2名は1997年1月25日からの氷ノ山登山を計画した。

淡路労山の3名は流れ尾から氷ノ山山頂泊、翌26日東尾根から下山、南但山歩会の2名は25日中の日帰り予定であった。25日朝8:00福定で合流、9:00流れ尾より登山開始、12:40山頂避難小屋着。13:40淡路労山の2名は下山を開始するが、猛吹雪のため流れ尾への取り付きルートを発見できず山頂小屋へ引き返す。翌26日吹雪の中を全員で流れ尾を下山中、ルートを間違えオオダニ方向に迷い込み雪崩に巻き込まれ、4名は雪崩に埋まってしまうが、1名は脱出、スキー場の手前で力尽きたものと推測される。

1月27日から捜索を開始したが、全員が行方不明となったため遭難場所がなかなか確定できず、地元救助隊だけでなく、近畿ブロックの仲間も含めた大量の支援を受け、4月5日から13日までの間に全員の遺体が発見・収容された。この事故で初めて県連救助隊も出動した。

14 金剛山登山中の急病死

1997年10月10日西宮明昭山はBランクの例会として「金剛山・久留野峠～紀見峠間縦走」を取り組んだ。当日の参加者は28名、2班に分けて登山口を10:00に出発。10:40久留野峠着。リーダーの溝淵和彦(65)さんの調子が悪く、ここまでに2回の休憩があった。11:15頃高谷山の少し手前で先頭を歩いていた溝淵さんが又立ち止まり、サブリーダーを務めていた奥さんに疲れを訴えた。これまで立ち休憩を含めて4回も休憩していた。症状が悪くなり、激しい発作を繰り返し咳き込んできたので、無線機と携帯で救急車の手配を依頼した。例会は中止し、メンバーの看護婦さん二人が気道確保と心臓マッサージを行った。13:10ようやく到着した救急隊員により蘇生作業が繰り返され、担架で移送されることになったが、心拍は停止していた。14:20病院に到着。呼吸器を付け、心臓マッサージが施されたが回

復しなかった。死因は心筋梗塞。

15 五竜岳ガス中毒事故

2002年3月20日から24日まで神戸カタツムリの会の江藤敏行(53)さんは職場の山仲間達合計5名で遠見尾根から五竜岳登山を取り組んだ。20日夜行列車で大阪を出発、21日6:00神城発、テレキャビン、リフトを乗り継いで9:10地蔵の頭着、12:30大遠見着、強風のため雪面を1m掘り下げた穴の中にテント設営、風上にはさらに雪のブロックを約70cm積む。22日5:30起床、8:20出発、10:30白岳山頂、10:40五竜小屋に着くが、11:30悪天のため引き返す。13:30テント場着、23日朝8時か9時頃一人が目覚めると頭がふらふらして立っておれない状態であり、江藤さんら2名は死亡していた。死因は一酸化炭素中毒。この山行は職場の仲間との個人山行であり、会への計画書の提出はなかった。

16 愛知川沢登り遭難事故

西神戸山の会は2002年7月13日愛知川に日帰り沢登り例会を取り組んだ。参加者は林文夫(52)さん他4名。7:30新長田を自家用車で出発、9:40愛知川林道駐車場着、沢登り装備を装着し10:10取水堰から入渓。3日前の台風6号の影響で水量が多かったが、急流部は適宜巻きながら遡行。天狗滝には予定より1時間遅れの14:40着。15:00沢通しに下山開始、林さんは終始積極的に沢芯を探して泳ぎ下りを楽しんでいたが、16:40ツメカリ谷出合いを過ぎて落差150cmほどの樋状落ち込みを滑り降りようとして途中の流木に引っかかり、流れが急なためすぐには救出できず溺死。搬出は翌14日になった。

17 不動岩転落事故

兵庫県勤労者山岳連盟は2004年5月12日から9月17～20日の終了山行間で座学7回実技10回の「2004年中級ロッククライミングスクール」を取り組んだ。5月23日その第1回実技が裏六甲不動岩で実施された。受講生であったメラピークKOBの横山琴美(53)さんは東壁すなかぶりルートに登攀後の12:55頃、同ルートを懸垂下降時にザイルが解け、支点位置より約30メートル転落。14:12ヘリにて病院へ搬送されたが、翌25日10:12全身打撲により死亡。事前に講師団が学んでいたザイル結束の末端処理について、その方法を間違えると解けてしまうという問題点が明らかになった。

18 富士山遭難事故

2005年夏には全国連盟のガッシュブルム 峰遠征が計画されていた。そのメンバーであった西宮勤労者山岳会会員土屋孝右衛さんは2005年4月24日他のメンバー有志3名と共に高所順応訓練を兼ねて富士山登山を取り組んだ。8:00馬返し1合目出発。10:005合目佐藤小屋着、12:457合目着小屋横にテント設営。24日4:00起床5:45出発9:45富士山頂着。それまで同じ行動をとっていた西宮労山パーティーも遅れて到着。10:00下山開始、確保の練習のため土屋さんはメンバーの一人に確保されながら下降し、ピックで次の支点づくりをしている時にバランスを崩し滑落、すぐ頭が下になりハーネスが脱げ頭を下にして200～300m滑落し、頭を強く打つなどして死亡。又救助に向かう途中で西宮労山の1名も滑落したが30mほど下で夏山登山道の鉄柵とロープに引っかかり停止。股関節の脱臼と打撲で動けなくなりヘリコプタ - で救出された。

19 比良・口ノ深谷遭難事故

2006年7月16日山歩溪山岳会は夏山・北鎌尾根のトレーニングも兼ねて比良・口ノ深谷の沢登り山行を取り組んだ。参加者は牧逸生(65)さん他3名。7:30西宮の事務所を自家用車で出発、9:15葛川坊村に到着。10:00頃林道出合いから入溪、牧さんはハーネスもヘルメットも着けていなかった。12:52頃流木に阻まれた斜瀑の右岸を高巻き中に滑落し、頭蓋骨損傷、頭部陥没により死亡。当初事故場所が特定できず、また折からの梅雨の長雨で搬出活動は捗らず2日になって搬出された。

20 前穂高岳遭難事故

2006年10月垂水勤労者山岳会は前穂高山行を取り組んだ。コースは北尾根～前穂～岳沢～上高地にいたるもので、メンバーは安田尚代(50)さん他2名。10月6日9:00大阪駅を出発、松本から電車、バスを乗り継いで上高地に入る。16:45徳沢着、テント設営。7日5:00徳沢発新村橋から奥又白谷を経てパノラマコースに入る。7:00途中から遅れ気味だった1名は安田さん達の足に合わせて歩くことができないことから、屏風のコルから涸沢へ抜けて上高地へ下ることになり別れる。10:40、5・6のコル着。幕営予定を変更し先へ進む。14:45前穂着、雪がちらつき始めた。岳沢へ向かうが、16:00頃ルートの間違いに気づき、そこでビバーク。ポールを落したためテントが張れず、テントを被ってシュラフに入って寝る。8日積雪は10cm位だったが前日よりも天気は回復。8:00前穂へ上り返し、再び岳沢へ下り始めたが、又ルートを間違え崖に出てしまう。ふたたび上り返すが15:30頃安田さんが「目が見えない」と訴えたので再びシュラフに入りテントを被ってビバーク。翌9日3:30頃安田さんは冷たくなっていた。死因は凍死。

21 六甲・西山谷転落事故

2006年11月26日武庫勤労者山岳会は六甲山西山谷にハイキング部主催企画ハイキングを取り組んだ。参加者は8名。8:40JR摂津本山駅に集合、バスで渦森台へ、9:30西山谷に入る。10:38西山大滝右岸の高巻きにかかる。4番目に登り始めた井上比香子(64)さんは滝の上部直下で転落、下部(水深30cm)まで約15m落下し、頭部損傷、意識不明となる。すぐに救助要請、12:20ヘリによる吊り上げで病院へ収容されたが、13:09死亡。死因は脳挫傷。

22 氷ノ山不動沢遭難事故

2007年3月4日、但馬労山の中尾弘枝さん(54)は、単独で氷ノ山に出かけた。親水公園の登山口ポストに入れてあった計画書には14:40に入山し、18:00に下山予定であった。

氷ノ山越に17:09着、その帰りに沢に迷い込み、本人から京都在住の娘さんの携帯へ18:00～19:00の間に5回にわたって「滝のそばにいる、大変寒い、助けて」と留守録メッセージが入っていた。5日3:00前に京都府警から養父警察へ捜索依頼があり、8:00頃から捜索が開始された。労山連盟へ電話が入ったのは5日早朝となるが、23:00頃には県連救助隊10名が車で神戸の事務所を出発した。6日10:20頃県連救助隊のメンバーが、不動滝上部の沢に浮いていた中尾さんを発見、搬出したがすでに死亡していた。所属会にも連絡なしの単独山行であった。 (安留)

自然保護活動

六甲山河川水質調査

1971年～1973年にかけて六甲山頂にホテルや企業の保養所が続々と建設され、河川の汚染が深刻になっていた。兵庫県勤労者山岳連盟は独自に六甲山系26河川の水質調査を実施した。その結果、汚染が甚だしくその原因が山頂のホテルや保養所からの汚水の垂れ流しであることを突き止め、神戸市に善処を要望。神戸市衛生局の指導にて、これ等の施設に浄化槽の設置をはじめ、適正な施設の整備をさせた。

氷ノ山の自然を守る運動

(1)大幹線林道計画とその目的

丁度、六甲山の水質調査をしているころ長野県から美ヶ原のピーナスライン建設反対運動の支援を依頼され、それに応えて6,000人の署名を集め協力したことが、氷ノ山の自然を守る運動に取り組む大きな力となった。氷ノ山は鳥取県との境に位置する氷ノ山・後山・那岐山国定公園の主峰で、中国地方では大山に次ぐ高峰、兵庫県では最高峰である。昔から多くの岳人に冬山入門コースとして、あるいは、スキーツアーにと親しまれており、住民との結びつきも信仰の対象、峠越えの交通路として古来より伝説の多い山である。

このような氷ノ山が「但馬山岳スカイライン」と呼ぶ観光道路によって開発されようとしたのは、1966年8月に兵庫県「県勢振興計画」を発表してからであった。私達はスカイラインの建設が1,000mを越す稜線上にまで進み、鉢伏山(1221m)の山腹が無残に傷つけられたり、氷ノ山の南山麓のブナの原生林が伐採されるようになった1971年になって、はじめて事の重大性を知ることができ直ちに「計画の白紙撤回」を要求した。

大幹線林道、正式には大幹線林道一号線 瀬川・氷ノ山線は、兵庫県勢振興計画にもとづき1966年、美方郡村岡町兎和野

を基点として瀬川山・鉢伏山・氷ノ山を結んで宍粟郡波賀町にいたる全長42.8kmの路線として計画された。そのうちの村岡町～関宮町の瀬川線は1972年12月に開通した。

ところが、関宮町～波賀町戸倉にいたる氷ノ山線は関宮町八手高原で約600m施行されたところで住民の反対にあい中断してしまった。この部分は関宮町八手高原の標高900m地点から氷ノ山越え(1250m)に登り、北斜面の急峻な岩場地帯をほぼ同じ標高で横断して大段平上の1280m地点で大屋町側と結び、延べ12.4kmであった。



地元の各町では、起点になる村岡町と終点になる波賀町が両手を挙げて賛同し、通過地区となる大屋町と関宮町も地元負担軽減を条件に一応賛成していたのである。各町には過疎から何とか抜け出したいとする強い願いがあり、この大幹線林道に大きな期待が寄せられたのも当然である。

しかし、県の真の道路建設の目的は「但馬地域での自然・人文等の観光資源はよく保存されており、海浜部、山岳部いずれをとってもレクリエーション・ポテンシャルが高い。そこで、この海岸部の奇岩、怪石、断崖と海蝕洞門で代表される岩石、美の景観 ならびに高原と渓谷と緑の里に代表される山岳部の立地的個性を活かしつつ、相互に密接に関連する観光地造りをめざし」、「山と海をいかに有機的に結びつけるかが今後の但馬観光開発の成果を決定づける」との立場から山岳高原と海をつなぐ観光ルートの整備を急ぐことを開発事業の目玉として推進していたのである。

この林道という名のスカイラインは、もともと観光自動車道路である道路に「林道」という名をつけることによって林道振興が目的であるかのようにカムフラージュし、県民と地元民を欺いたものである。同時に「林道」という名目で道路をつくれれば、通常の自動車道路をつくる基準にあわず必要がないため安い経費で工事ができるといった一石二鳥の効果を狙った通常な計画とは程遠いものであった。

(2) 反対運動の経過

1. 1971年10月、兵庫県勤労者山岳連盟は大幹線林道「瀬川・氷ノ山」ならびに「妙見・蘇武線」の建設の中止と白紙撤回を要求する声明を発表し、氷ノ山、鉢伏山をはじめとする但馬の山々における自然破壊を広く県民に訴えろと共に、これを県議会、環境庁へ提出した。
2. 1972年3月、兵庫県勤労者山岳連盟は県議会に大幹線林道の建設中止を求める請願書を提出した。
3. 1973年2月、関宮の自然とくらしの歴史を守る会、兵庫県自然保護協会但馬支部、兵庫県野鳥の会但馬支部ならびに、兵庫県勤労者山岳連盟は、運動を全県的、全国的なものにするため「氷ノ山の自然を守る会」を結成し、国と県に向かって計画の再検討と科学的な調査を求める署名運動を全国的に展開し、84,000名の署名を集めて大きく世論を巻き起こしていった。
4. 「氷ノ山の自然を守る会」は、2月19日環境庁に坂本政務次官を訪ね、路線の変更を陳情し、「自然保護の面から計画の練り直しを支持する」との回答を受けた。

このような経過を受け、県は3月6日突然、計画路線の大幅変更を発表した。この変更は、これまでの硬直した姿勢を改め住民の声に耳をかたむける態度を示したものではあるが、いぜん科学的調査も地元住民、自然保護団体の意見も聞くこともなく、役人による机上の線引きであり、納得できるものではないと、既定方針通り工事の一時中止と計画の抜本的再検討を要求した。4月に入って三木環境庁長官は、衆議院環境保全特別委員会で木下元二議員の氷ノ山の自然保護と大幹線林道についての質問に対し、「一日を争う工事ではないので、必要な調査をした後において工事を行うよう行政指導を行う」と答弁した。それを受けて、5月の県会において兵庫県は、「工事は強行しない、科学的な調査を実施する。地元住民や、自然保護団体の同意を得る」と確約するにいたった。

それ以後、県は自然保護団体と話し合いを持ったが、路線計画を二転、三転させ、第四案までいっ

での協議となった。路線については、次のような諸点を県側に要求した。 福定、奈良尾部落の水道、灌漑用水源を破壊しないこと。 東尾根にいたる耕地内は民有地をさげ部落有地をとおすこと。 東尾根は最低地点で乗越すこと。 大段平では安井峠で既設の大屋町林道と接続し、大屋町横行部部落へおろすこと。これによって現在文字通り雲の上のスカイラインでしかなかった大幹線林道を大屋町住民にとって生活道路とすることができる。

福定側は住民の生活に役立つ林道として基本的に合意に達したものの奥山国有林にあるブナ原生林内の通過、大段平の乗越、イヌワシ問題など県が最終案とする第五案には反対の立場を表明した。しかし、県はそれまで中断していた工事を再開し、毎年 1km づつ工事を進行させて1988年9月、「瀨川・氷ノ山線」は開通した。

その間、毎年5月には「氷ノ山自然を守る登山大会」が実施され、最盛期には800名を超える規模で行われ1990年の18回まで続けられた。

この14年間に亘る運動こそ兵庫県連盟における山岳自然保護運動のバックボーンとなったシンボリック活動であり、全国の自然保護運動の牽引車となった価値のある運動であったといえる。

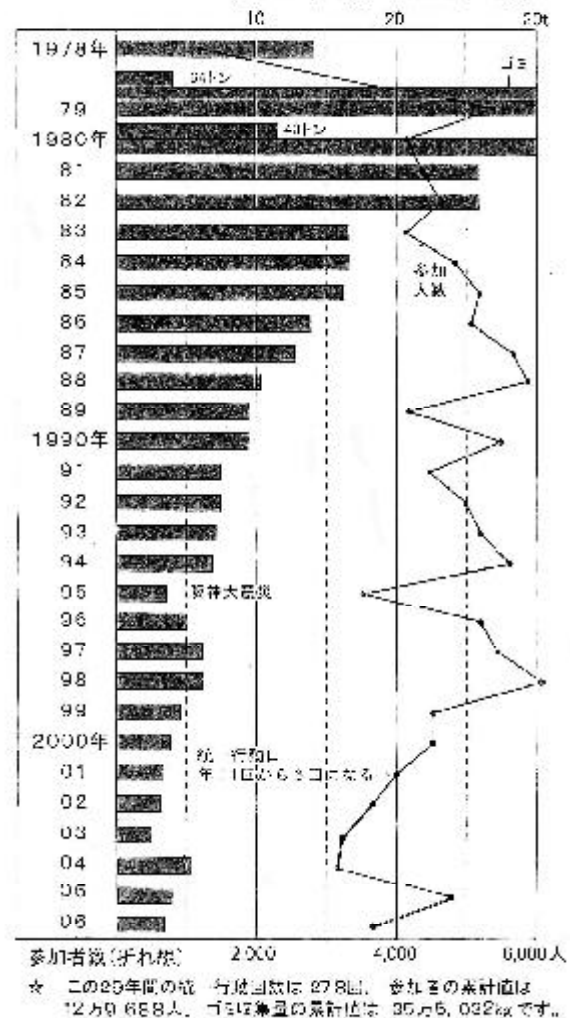
六甲山からゴミを一掃する運動

(1) こうしてゴミ一掃は始まった

神戸市の背後に位置し、多くの登山愛好者に親しまれている六甲山は、1960年代に押し寄せた観光ブームのあおりを受け、お客と共に大量のゴミをも受け入れ深刻なゴミ問題を抱えることとなった。六甲山に登るたびにいやおうなく眼に入るゴミ、空き缶の山を「何とかしたい」という思いから、各山の会では年に1~2回「清掃登山」という呼び方で清掃活動を行っていたが、拾らっても拾らってもなくなるゴミの山を前に、大きな決断を迫られることとなった。

かくして、各山の会の取り組み実績と、越後の「みちくさ山の会」の越後・駒が岳における清掃登山の実績（単一登山会が毎月清掃登山をしていることが『山と仲間』に掲載されていた）に刺激されて、第11回兵庫県勤労者山岳連盟総会（1975年11月）において『六甲山からゴミを一掃することを兵庫県連盟の使命として、全登山者さらには、自然に親しむ人々がゴミは捨てない、持ち

ゴミ収集量および参加者数の推移
(1978年10月~2008年12月)





帰る」というモラルが確立するまで(半永久的に)取り組むことになります』と提唱された。

2年後の第13回総会(1978年)で、当面の毎月の統一行動日と各山の会の清掃コースを設定し、「六甲山からゴミを一掃する運動」の第一回の統一行動が1978年10月22日に実施された。

同年10月、各会宛に配布された「事務連絡」にはこう示されている。

「六甲山からゴミをなくするにはどうすればよいか。ゴミ持ち帰りが社会的常識となり、ゴミが消えるまで、粘り強く清掃活動を続けることです。ただ清掃だけでなく、各登山口にゴミ持ち帰り運動の立て看板や横断幕を設置したり、ビンや缶の業者に空き缶の回収を呼びかける。あるいは自治体にゴミ回収を要求するなどの活動をしていくことが大切です」こうして、単なる「清掃登山」ではなく、「ゴミは捨てない持ち帰る」というモラルの確立や自然保護運動に誇りを持つ場として「ゴミ一掃」がスタートした。

第一回の統一行動日は30山の会、310名、25のコースで実施されたと記録されている。ゴミの量はすさまじく、一日かかってもコースのほんの一部しか清掃できなるとか、多すぎて回収地点までもって降りることができず、レンタカーを使ったり、会員の軽トラックで回収するとか、作業が日没を過ぎることは珍しくなかった。10、11、12月と年内3回の行動日に延べ945名の方が参加し、13.7ト(一回約5t)を回収している。この量は1997年の約10倍の量である。

勿論、当初からすんなりと、この運動が始められたわけではない。統一行動にすることの是非についての激しい議論が、いろいろなレベルで毎日のように繰り返され、総会採択まで2年を費やしている。始まってからも「六甲山を綺麗にするなんて無理や」、「やってもやっても無



2004年 環境大臣賞表彰状

くならへん』「行きたい山にいかれへん」という無力感を訴える人も出てきた。

しかし、毎月一回実施していく中で、現実にごみが少なくなっていく。やりがいが出てくる。一般市民の参加が増えてくる。この運動を通じて山の会に入ってくる人達が増えてくるなど、明るい見通しがもてるようになり、だんだんと運動が定着していった。

それに伴い、行政にむけてこの運動に対する積極的施策を求める交渉を積み重ね、ゴミ袋の提供、回収車の巡回、ゴミ置き場の設置など、神戸市をはじめとする関係市から協力していただけるようになっていった。

このように「六甲山からゴミを一掃する運動」は各山の会の熱意が一般市民を動かし、マスゴミを動かし、行政をも動かし、一步一步着実な歩みで市民権を勝ち取り、今では押しも押されもしない兵庫県を代表する環境保全事業の一つに発展してきたといえる。

その結果、1998年 兵庫県知事賞「くすのき賞」受賞。 ゴミ一掃20周年六甲山頂上集会
2004年 環境大臣賞受賞。 第46回自然公園大会 日光国立公園にて
の栄誉を受けることができた。

そして、2001年から統一行動日を11回/年から6回/年に変更し、2004年から、運動の呼び名を「兵庫の山からゴミを一掃する運動」と改訂し再スタートしている。

次に「ゴミ一掃運動」が兵庫県連盟での自然保護運動の原点となり、次々と他の部門に活動を広げていったことを強調しておかねばならない。眼にあまる不法投棄を摘発し当該自治体に報告したりしていたが、今では継続して全県規模で実施するようになってきている。また、六甲山系においてハイカーの癒しになっている湧き水の水質調査にも本腰を入れて取り組んでいる。

そのほか、兵庫県が推進する氷ノ山登山道整備事業計画に対する企画変更提言、単一山の会による登山道の整備なども行ってきている。

(2) ゴミ一掃の課題

28年におよぶ運動の成果により、各山の会が受け持つ登山道は見違えるように綺麗になった。いうまでもなくハイカーや登山愛好者のモラルが向上した為だといえる。その結果として今、ゴミの主戦場が登山道から山頂の車道脇、および駐車場、キャンプ場に移ってきたことである。即ち、車社会のポイ捨て問題と、相変わらずの不法投棄問題が残ってしまった。この社会的な病理現象の病根は、20世紀後半の大量生産、大量消費、大量廃棄社会が造りだした負の遺産といえよう。



この2つの現象を前に我々は山に携わる人間だけでは解決し得ないことであり、川や、沼や、海や都市において同じ悩みを持ち活動している同胞と共同し、自治体をも巻き込んで共に大きなうねりを起し、通産省、農水省に押されて遅々として進まない廃棄物問題解決の世界的指針である「拡大生産者責任の思想」(製品の製造から消費・引取り・リサイクル・適正処分までのライフサイクルで、製造者に全ての責任を負わせて、製品から発生する環境負荷の低減を目指す戦略)を前面に出した循環型経済社会構築に向けた改革の提言を一步一步進めていこうと考えている。

芦屋ロックガーデンの自然を守る運動

日本における近代登山の発祥の地であり、藤木九三氏らによるRCC誕生の地である芦屋ロックガーデンにおいて、1981年1月環境庁と兵庫県は、多くの登山者、市民、県民の反対の声を押し切って、「登山道整備」の名のもとに破壊工事を強行した。ロックガーデン中央稜は既に取り付け部の岩場が宅地造成地のごとく石垣と化し、187段におよぶ石段と、22ヶ所の横断側溝が登山道を切りさき、さらに土留・擁壁を15ヶ所も設置された。さらに登山道が侵食されて溝状になった部分に枕木を鉄筋でとめた200段の階段を作り、さらに25ヶ所の横断側溝を設けることにより、六甲山を代表する登山道を「公園」の道に変えてしまおうとした。

兵庫県勤労者山岳連盟は兵庫県に対し、直ちに工事中止を申し入れると共に、全国の登山愛好者に呼びかけ5ヶ月あまりで実に160,000人の署名を集めた。山岳自然保護史上最高の署名数となった。その時、多くの登山愛好者にコメントをいただいているが、その中には、本多勝一(朝日新聞)橋本竜太郎(元総理)長谷川恒男、小西政継(登山家)伊藤正一(労山名誉会員)西本武志(前労山理事長)らの名も見られた。

環境庁はすさまじい署名の延びに驚異を抱き、兵庫県に工事の一時中止を命令した。現状復帰の工事を行ったが、高座の滝上部の取り付け部分についてはコンクリートで固めたまま残された。私達はこの部分についても完全復元を要求した。県相手では話が進まず、6月に大学会長他が環境庁に出向き鯨岡環境庁長官に掛け合ったが、長官いわく、「君らの主張は良く分かるが、この辺でがまんしてもらえないか」と丁重に出られ、この段階で終結することになった。現在も高座の滝の上部にその時の残像が残っている。この運動は都市近郊での自然公園の整備のあり方を問うものとして、大きな位置づけがなされたと考えている。

芦谷川の自然を守る運動

1981年「神戸の秘境」芦谷川の上流に産業廃棄物の埋め立て処分場をつくる計画が神戸市よりだされた。地元住民と共に4団体からなる「北神戸の自然と文化を守る会」を結成し、事務局をつとめ運動の牽引車となった。55,000名の署名を集めるも、処分地不足を理由に1983年に工事着工となった。また、この時期やはり北神戸の秘境である屏風谷にゴルフ場が建設されることが発表され、これを阻止する署名運動も行った。

布引・市ヶ原の自然を守る運動

神戸人工島の建設、芦谷川埋め立て、住吉川新交通路建設に続き、神戸市は1988年2月「布引公園整備計画」を発表した。世継山を国際文化ゾーン(植物園、展示館)とし新神戸駅よりロープウェイでつなぎ、市ヶ原側の斜面に自然生活ゾーン(子供の城、野鳥の森、キャンプ場)を建設するというものであった。直ちに地元の有志と共に「布引・市ヶ原の自然を守る会」を結成し事務局をつとめる。65,000名の署名を集めがんばったが、南斜面の山頂植物園等施設とロープウェイ施設は強行された。しかし、裏側の野鳥の森等と進入道路の建設は中止させることに成功した。

武庫川溪谷をダム建設から守る運動

武庫川流域委員会は2006年8月31日、2年半におよぶ議論をまとめ、河川管理者である兵庫県知事にその結論を提言した。

その内容は「向こう30年間の河川整備計画においてダムは建設しない。また、向こう100年間の河川整備基本方針においても、ダム建設は検討項目に入れるが、利水目的の既設ダムの利用や、遊水地の設置を優先する」というものである。

武庫川流域委員会は発足直後から次の二点において、国内で画期的な試みであると注目を集めていた。一つは、「河川整備基本方針の段階から審議する。即ち、最大洪水量(基本高水流量)の数値をどう決めるかから議論する。あと一つは、委員の人選にあたって公募で25名中10名を選んだ」点であった。

向こう30年間の対策としては
既設ダムや中下流の遊水地で洪水を調節する
河川からあふれないよう河道を広げたり堤防を強化する
流域にある校庭や水田に一時的に雨水をため、川に流れ込む流量を調整する。
流域委員会では中でもの流域対策を重要視している。



また、より長期的な河川整備基本方針では、利水ダムの多目的ダム化や遊水地の増設などの代替案を、新規ダム建設より優先させるよう求めている。

ある河川工学の専門家は「武庫川流域委員会の結論のプロセスは画期的で、提言も先進的である。全国の河川行政を変える呼び水になるのではと注目している」とコメントしている。

今後は、河川管理者である兵庫県がいくつかの検討過程を経て、結論を出すことになる。しかし、県は飽くまでもダムを作ろうとの意図は捨てていない。私達は県の動静を細かくウオッチし続け、何かあれば以前のように直ちに行動に移す心構えが必要である。一方、先に述べたごとく全国から注目されている規範的な提言であることをふまえ、見苦しい行動を起させないよう県に強く求めていく必要がある。

兵庫勤労者山岳連盟が武庫川ダム反対運動に取り組んだのは1998年9月に兵庫県議会に対し建設中止を求める請願書を提出したのが始まりである。運動を始めるかどうかについて、「山までないのに何故関わるのか」と疑問符を投げかける意見もあった。しかし、「ダム建設問題は全国の山岳自然を大きく破壊してきた現実があり、ここにはハイキング道があるではないか」ということで意見一致にこぎつけた。前に進む事になったものの、まだ運動の状況や経過が理解できていなかった。

そこで、そのころ既にエネルギッシュに運動を展開していた「武庫川を愛する会」の谷田代表に神戸に来ていただき30名ほどを集めて勉強会を行った。

一方、私達ができることでアピールしようと、1999年5月・6月の2回 武庫川渓谷の清掃を行った。参加人数は640人、ごみ量は 3.8トンであった。この清掃は現在も年一回6月に続けられており、地元住民から歓迎されている。

2000年4月、三宮センター街において「武庫川ダム反対署名運動」を開始した。「目標は2年間で5万筆を集める」であった。ダム予定地、宝塚駅周辺を中心に各山の会に人を割り付けて実施された。時期は少し遅れたが2003年1月に目標の5万筆を達成した。1万筆集めるたびに県の河川計画課長に手渡していたが5回目に行ったときは、さすがに顔をこわばらせていい加減に勸弁してくださいよ」といわせた。

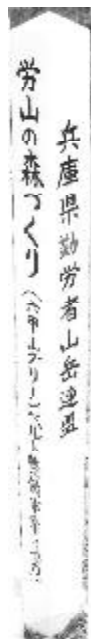
その他、見学会、講演会等数々のイベントをやって来たが特に記憶に残っているものとして 2001年3月・4月にかけて行った「武庫川県民ウオーク」であった。愛宕山の源流から4日間を歩いて尼崎の河口まで県の河川課の課長も参加してのデモンストレーションは大いに効果を発揮した。

このような運動の成果として、知事の「ダム問題はゼロベースより見直しする」として「武庫川流域委員会を設置して地元住民の意見を聞く」の発言を引き出す事ができたのである。



六甲山系での植樹活動(労山の森づくり)

1997年秋より、被災した六甲山の山肌に植樹をする活動を始めた。初年度は14の山の会が各会のクリーンハイクエリアを中心にエゴ、コブシ等約100本の木を植え、その後参加会は減りながら2005年まで続けてきた。そのかいあって2006年3月には国土交通省の



六甲山グリーンベルト事業(山地と市街地の境界に落葉樹の茂ったベルト地域をつくり防災に強く綺麗な街づくり構想)に協力し、住吉川流域(元水車小屋跡地)に約100㎡を提供いただき約100本のコブシ、ヤマザクラなどを植樹した。

そして、この運動を「労山の森づくり」と名付けた。地元住民、三つの

賛助団体などの参加があり、約130名でにぎやかに行われた。

2007年2月に約80名を集めて、第2回の「労山の森づくり」が前年度のすこし上流の場所で行われた。約100本の苗木が植えられた。

(村上)

冒険学校の取り組み

意義・目的

今から約33年前、全国連盟が、都会の子どもたちに本当の自然の中で生活することを目的に、群馬県の葉留日野山荘において「冒険学校」を始めた。兵庫労山は、その2年後の1976年に同じ施設、葉留日野山荘を利用したスタートであった。

その考え方の基本は「すべての登山愛好者・自然に親しみたいと願っている人の要求に応えることは、労山の社会的使命である。」との立場にたって、社会的弱者である年配者・子供・婦人・障害者についても積極的にそのことが保障されるべきである。その具体的な取り組みの一つとして、子供のための冒険学校が実施されました。また、同様の趣旨で、障害を持つ人々の声にも応えるということで、これらの人たちへの取り組みが始まったのもこの頃である。

私たちの冒険学校は「はじめて知り合った子どもたちが共同生活・共同作業をし、さらに力を合わせて困難を克服することによって共同性や自主性が生まれ、また、他人を尊重し、自分を再発見する場」として位置づけて活動を行ってきた。子供たちを少人数の班編成にし、班での行動を重視して野外生活を中心に行なった。

登山行動では、「チクサクコール」というかけ声でお互いを励まし合い、夜の交流会では、班自身自らの力で、色んな出し物を創作・演出してきた。

これらの活動・経験などが、一人ひとりの生活のターニングポイントになってほしいとも考え、積極的に発言・行動できるよう指導してきた。

活動の経過と運動の広がり

前記のように1976年夏、夜行列車を利用しての冒険学校は子ども58名、指導員9名という体制であった。大変疲れたが、子どもたちはそうではなかったようであるし、保護者にも喜んでいただいたようで、閉校式(反省会)では「夏があるなら春もやってほしい」との声が多く出され、翌年の春には八千高原で取り組むことになった。これも、バス1台の予定が3台にしなければならない状況だった。さらにこの年の夏には、一次・二次のバスを利用した葉留日野山荘への取り組みとなった。

遠いところへ行かなくても近くでと1978年の夏は日名倉キャンプ場を利用し、一次・二次でそれぞれがバス2台という多くの参加があった。また、この年の冬からはスキー教室を戸狩スキー場で行った。(スキー教室では独自の評価でバッジテストを行った。)

キャンプ生活では、内容のマンネリを防ぎ、新たな展開を目指して登山を意識した上級コースも始め、丹生山系の子ども縦走も行った。インドのモダンスクールとの交流を趣旨とする「インド冒険学校」も行った。

私たちの冒険学校のテーマソング「あの青い空のように」を合唱する声が響き渡った。

以来、連盟の冒険学校は、1999年まで続き、その冬のスキー教室をもって23年間にわたる冒険学校を終えた。(以上が県連主催冒険学校の概要である。)

1980年になると連盟内の各会でも、ハイキング形式や一泊キャンプ等の形で、各会の取り組みが

燎原の火のように広がった。須磨労山、山の会かじか、垂水労山が始め、この年は須磨、かじかがスキー教室も始めた。運動はさらに広がり、1981年には、山歩溪山岳会、神戸労山(スキー)も、さらに尼崎労山、西神戸山の会が日帰りの取り組みを始めた。1982年には、県連の分校として神戸教室(摩耶・神戸港)、尼崎教室(武庫・尼崎・ホワイトピーク)と新しい形の活動がおこなわれてきた。1983年には新しく武庫労山、神戸中央労山、甲山労山、神戸労山、宝塚労山も始め、1984年には、ホワイトピークも単独で活動をはじめた。

(後ページの冒険学校開催状況の欄外に活動を行った会を掲載している。)

成果

当初の意義どおり、子供たちに自然のすばらしさや仲間のよさを教えることができたものと思う。

また、子供たちにとってしんどい、ツライともいえるこの活動に、保護者の大きな支持を得られたこと、それが長く続いた大きな要因であると思う。

連盟の中でも、この活動を通じて成長し、会の運営に携わる会員も増えてきた。

課題

うまく後継者を育てることができなかった。また、世話をする指導員の高齢化が進んだことや、仕事が忙しくなり、十分な力を継続できなかった。

保護者も、登山活動を積極的に理解していたわけではないようである。

また、子供たちが来なくなった原因の一つに、私たち、運営をするものとして、「しんどいことを通じて人間性・ガマンする心やさしさ等を生み出す」ものとの考えを持ち、活動内容の中心にすえていたが、子供たちに受け入れられなかったのではないか。つまり、しんどいことが敬遠されるようになってきたのではないか。子供たちを巡る色々なニュースを聞くが、しんどいこと、初めて会う異質な他人と協同し自分の感情をコントロールすることを学べる冒険学校が、今こそ必要と思える社会状況となっているように感じる。

冒険学校のテーマソング

「あの青い空のように」

喜び広げよう 小さな僕たちだけど

あの青い空のように すみきった心になるように
さみしさわすれまい 小さな僕たちだけど

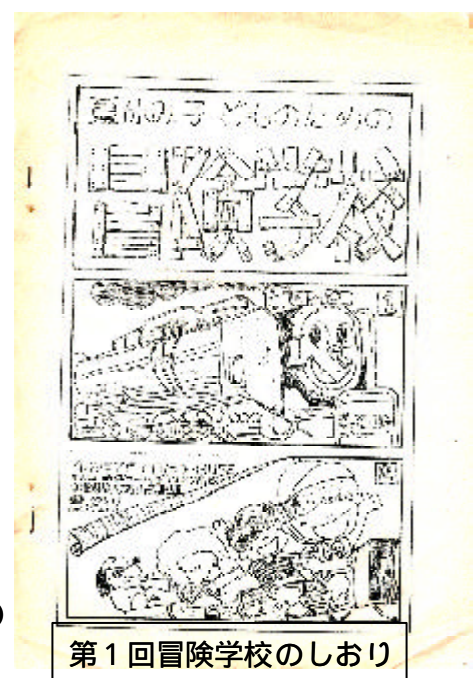
あの青い空のように すみきった心になるように
苦しさ乗り越えよ 小さな僕たちだけど

あの青い空のように すみきった心になるように
いかりを 燃やそう 小さな僕たちだけど

あの青い空のように すみきった心になるように
学び続けよう 小さな僕たちだけど

あの青い空のように すみきった心になるように

(喜多)



兵庫県勤労者山岳連盟 冒険学校開催状況

開催回数				開催日程	泊/日 (車中泊)	行事内容	会場	参加者			指導員			合計	交通 機関
夏	秋	冬	春					男	女	計	男	女	計		
1				76.7.31~8.5	5/6 (1)	キャンプ	群馬県葉留日野山荘			49		9	58	TRN	
		1		77.3.25~27	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原			142		21	163	BUS	
2				77.8.6~11	5/6 (1)	キャンプ(1次)	群馬県葉留日野山荘			41		11	52	BUS	
2.1				8.19~24	5/6 (1)	" (2次)				31		10	41	BUS	
		2		78.3.26~28	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原			133		20	153	BUS	
3				78.8.19~21	3/4	キャンプ(1次)	兵庫県 日名倉山荘			102		26	128	BUS	
3.1				8.24~27	3/4 (1)	" (2次)				88		24	112	BUS	
		1		78.12.26~30	4/5 (1)	スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場			37		11	48	BUS	
		3		79.3.30~4.1	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原			120		26	146	BUS	
4				79.8.3~6	3/4	キャンプ(1次)	鳥取県 若桜氷山キャンプ場			52		20	72	BUS	
4.1				8.6~9	3/4	" (2次)				57		13	70	BUS	
4.2				8.24~27	3/4	" (上級)	奈良県 大峰 上多古谷			43		18	61	TRN	
		2		79.12.26~30	4/5 (2)	スキー	長野県 志賀高原発鳴スキー場			54		15	69	BUS	
		4		80.3.28~30	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原			140		30	170	BUS	
5				80.8.5~8	3/4	キャンプ(1次)	鳥取県 若桜氷山スキー場			62		22	84	BUS	
5.1				8.7~10	3/4	" (2次)				69		24	93	BUS	
5.2				8.22~25	3/4	" (上級)	奈良県 大峰 上多古谷			23		17	40	TRN	
		3		80.12.26~30	4/5 (2)	スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場			72		15	87	BUS	
		5		81.3.27~29	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原			93		21	114	BUS	
*				81.8.6~26	20/21	ヒマヤットッキング ホームステイ	インド			14		4	18	APN	
		4		81.12.~		スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場							BUS	
		6		82.3.26~28	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原	20	15	35	5	7	12	47	BUS
6				82.8.7~10	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷山スキー場	25	19	44	6	9	15	59	BUS
6.1				82.8.27~29	3/4	登山	弥山(雨天) 三田・比良山	7	8	14	7	2	9	23	TRN
		1		83.秋		子供縦走	丹生 帝釈山系								
		5		82.12.25~29	4/5 (2)	スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	51	25	76	11	3	14	90	BUS
		7		83.3.26~28	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原	25	16	41	6	6	12	53	BUS
7				83.8.6~9	3/4	キャンプ(1次)	鳥取県 若桜氷山スキー場	30	15	45	8	4	12	57	BUS
7.1				83.8.11~14	3/4	" (2次)		24	16	40	4	5	9	49	BUS
		2		83.11.6		子供縦走	丹生 帝釈山系								
		6		83.12.24~28	4/5 (2)	スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	10	50	60	9	6	15	75	BUS
		8		84.3.30~4.1	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原	34	22	56	9	6	15	71	BUS
8				84.8.5~8	4/4 (1)	移動キャンプ	鳥取県 大山 鳥取砂丘	5	2	7	2		2	9	TRN
				84.8.9~12	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷山スキー場	46	33	79	8	10	18	97	BUS
		3		84.10.28		子供縦走	丹生 帝釈山系								
		7		84.12.27~31	4/5 (2)	スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	50	23	73	11	5	16	89	BUS
		9		85.3.29~31		雪遊び	兵庫県 八千高原	18	18	36	9	7	16	52	BUS
9				85.8.8~11	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷山スキー場	40	30	70	12	6	18	88	BUS
		8		85.12.~12.	4/5 (2)	スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	52	29	81	10	7	17	98	BUS
		10		86.3.28~30	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原	16	19	35	7	4	11	46	BUS
10				86.8.9~12	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷山スキー場	48	26	74	10	3	13	87	BUS
		9		86.12.26~30	4/5 (2)	スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	33	21	54	7	7	14	68	BUS
		11		87.3.27~29	2/3	雪遊び	兵庫県 八千高原	16	5	21	7	1	8	29	BUS

開催回数	開催日程	泊/日 (車中泊)	行事内容	会場	参加者			指導員			合計	交通機関
					男	女	計	男	女	計		
11	87.8.6~9	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	47	25	72	11	5	16	88	BUS
	10	87.12.26~30	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	41	27	68	10	7	17	85	BUS
	12	88.3.26~28	2/3 雪遊び	兵庫県 八子高原	26	14	40	11	3	14	54	BUS
12	88.8.11~14	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	37	22	59	12	6	18	77	BUS
	11	88.12.27~31	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	32	37	69	13	8	21	90	BUS
	13	89.3.31~4.2	2/3 雪遊び	兵庫県 八子高原	18	13	31	11	3	14	45	BUS
13	89.8.9~12	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	37	22	59	14	6	20	79	BUS
	12	89.12.26~30	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	27	47	74	12	7	19	93	BUS
	14	90.3.30~4.1	2/3 雪遊び	兵庫県 八子高原			47			12	59	BUS
14	90.8.9~12	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	31	28	59	13	4	17	76	BUS
	13	90.12.26~30	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	27	42	69	10	6	16	85	BUS
	15	91.3.29~31	2/3 雪遊び	兵庫県 八子高原	21	27	48	6	9	15	63	BUS
15	91.8.8~11	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	27	37	64	11	7	18	82	BUS
	14	91.12.26~30	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	30	43	73	11	6	17	90	BUS
	16	92.3.27~29	2/3 雪遊び	兵庫県 八子高原	15	15	30	7	5	12	42	BUS
16	92.8.7~10	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	25	17	42	8	7	15	57	BUS
	15	92.12.26~30	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	21	43	64	13	3	16	80	BUS
	17	93.3.26~28	2/3 雪遊び	兵庫県 八子高原	10	18	28	16	2	18	46	BUS
17	93.8.5~8	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	19	20	39	8	5	13	52	BUS
	16	93.12.26~30	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	26	41	67	9	4	13	80	BUS
	18	94.3.26~28	2/3 雪遊び	兵庫県 八子高原	5	3	8	8	10	18	26	BUS
18	94.8.6~9	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	17	9	26	9	5	14	40	BUS
	17	94.12.27~31	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	30	34	64	11	5	16	80	BUS
	-	95.3		震災のため中止								
	-	95.8		震災のため中止								
	18	95.12.27~31	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	16	22	38	6	4	10	48	BUS
	19	96.3.29~31	2/3 雪遊び	兵庫県 八子高原	3	6	9	4	1	5	14	TRN
19	96.8.10~13	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	6	9	15	8	3	11	26	BUS
	19	96.12.~12.	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	14	25	39	8	1	9	48	BUS
	-	97.3.~		実施不明								
	20	97.12.27~31	4/5 (1) スキー(中止)	長野県飯山市 戸狩スキー場								
	20	98.3.26~30	4/5 (2) スキー	長野県 八方尾根スキー場	2	4	6	5	1	6	12	BUS
20	98.8.7~10	3/4	キャンプ	鳥取県 若桜氷ノ山スキー場	3	3	6	3		3	9	TRN
	21	98.12.27~31	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	6	6	12	6		6	18	TRN
	22	99.12.27~31	4/5 (2) スキー	長野県飯山市 戸狩スキー場	4	2	6	4		4	10	TRN

ほぼ概要ですが、一部不明のところもありますことをご承知ください。

各会 (当時の会名)が実施した冒険学校(子ども行事)

但し 日時・内容・規模 実施回数 未把握です。

阪神地区

山の会かじか・尼崎労山・山歩溪山岳会・尼崎教室「尼崎武庫ホワイトピーク連合」・武庫労山
宝塚山の会・ホワイトピーク・甲山労山・尼崎ハイキングクラブ

神戸地区

須磨労山・垂水労山・神戸労山・西神戸山の会・神戸教室「摩耶・神戸港連合」・神戸中央労山
神戸カタツムリの会・山の会アルプ・

障害者登山の歩み

兵庫県障害者連絡協議会より、障害者も登山をしたいので手伝ってほしいとの依頼を受け、県連盟は趣意書にあるすべての登山者の要求に当てる立場から、加盟各会の協力のもと1976年5月にお多福山登山、そして同年7月31日～8月1日に大台ヶ原登山バスを取り組み参加者からよろこばれた。

1981年兵庫視力障害者の生活と権利を守る会よりハイキングへの協力の依頼を受け、準備をすすめるも、第1回ハイキングは激しい雨で延期となり1982年3月西宮の甲山森林公園ハイキングをスタートとして以来、2ヶ月に1回のペースで視力障害者ハイキングを実施している。1985年7月の富士登山では、10名の視力障害者がピークに立つ事ができた。

肢体障害者の登山では、兵庫県肢体障害者協会・県連盟・ボランティアグループ「つかい棒」の3者で実行委員会体制を作り1986年 峰山高原の暁晴山、1987年淡路島の諭鶴羽山、1988年 丹波篠山の大野山、1990年丹波市青垣町の岩屋山、そして1991年8月に地元富山労山の協力を頂き、立山スカイハイクを実施した。

視覚障害者の生活と権利を守る会設立30周年記念行事として、1998年4月に島根県の三瓶山へ島根労山21名の協力を得て登山を成功させている。

視覚障害者ハイキングは、運動が全国的にも広がり、1995年5月に全国視覚障害者登山大会上高地集会へバス1台で参加し、以後2年に1回開催される全国集会へ積極的に参加してきました。定期的実施してきた視覚障害者ハイキングの中で、障害者自身でハイキングクラブを作る気運が高まり、2003年6月、視覚障害者の会「ハイキングクラブ・カメ2003」が26名で発足し、県連盟に加盟した。2006年7月には2回目の富士登山を成功させている。この活動は県労山にとどまらず、西宮明昭山の会においても会独自で知的障害児ハイキングをサポートし、保護者より感謝されている。

(中井)



女性と登山

1966年(平成41年)に兵庫県勤労者山岳連盟が発足し、「働く者の新しい登山運動を!」との気概と情熱で、20歳代の若者を中心とした積極的な会運営・登山活動の取り組みが開始した。

しかし、3年~4年と経過するうちに、多くの女性会員が結婚や結婚適齢期等の理由で退会する例が多く、女性のリーダーが育たない・増えないという悩ましい状況が生まれてきた。

当時はまだ一般に女性ば「女の子」であり、職に就いても結婚までで、「寿退社」がもてはやされ、結婚後の仕事の継続もせいぜい出産までが限界でした。お茶やお花等の習い事は褒められても、リュックを背負って山へと出かけることは冷ややかな視線を浴びるというのが世間一般の風潮であった。

そして、1971年(昭和46年)第6回総会で「これらの問題を一人ひとりの女性の責任にすることなく、女性会員をしてそのような状況に追い込んでいる世間や職場の古い誤ったものの考え方に対する正しい認識を女性会員のみならず、全会員が身につける活動を展開します」と婦人部が発足した。

まず取り組んだのは「女性が山へ登り続けるために」というテーマでの話し合いであった。会の中だけの話し合いでは堂々巡りとなり進展は困難であったが、県連の女性会員と話し合いを重ねる中で、女性会員にとって経済的自立が中心課題であり、その取り組みの中で関わりをもって浮上してきたのが社会の仕組みや職場や家族との人間関係であった。そして、それらを多くの女性会員たちが自らの問題と捉えた自覚的な活動が広がり、女性会員の連帯も深まっていった。

そして、全国的にも女性会員を中心としたより広い組織的な取り組みと運動が必要であるとの論議が広がり、1976年(昭和51年)には全国連盟の「第1回全国女性会員のつどい」が開催されることになり、その運営は婦人部活動の実績がある兵庫県連盟に任せられ、西宮市が開催の地となった。

山登りを通じてよりよく生きていきたいという熱い思いは全国の女性会員みな同じであった。「つどい」は熱気溢れる感動的なものとなり、その後、全国各地で婦人部が創られていった。



1976.7.10-11全国討論集会

それから30年近い歳月が経過し、婦人部も1984年に女性委員会と名称が変わり、連盟の中で女性会員の割合が50%を超え、女性リーダーが増え、会の運営にも多くの女性が関わり、女性だけの会も誕生している。

今日では社会的にも女性が結婚・出産後も働くことが普通となり、女性の生き方も多様化し、ハイキングや登山に限らず



1973.3 氷ノ山

広くスポーツ一般が女性や高齢者にとっても欠かせないものとして奨励されるまでに時代が変化しつつある。

登山の分野においては、若者が少なく中高年が圧倒的多数を占めるようになった。中でも女性は子育ての終了とともに、登山を始める人が多くなった。

こうした中で今、「女性の登山に対する真摯な姿勢」問われている。それは最近とみに多い女性の事故の問題であり、女性の登山知識と技術の向上は緊急の課題である。

中高年女性の事故の大半は経験年数15年まで、事故全体の1位の原因は「道迷い」であり、総合的に現在地を見つけ出す能力が男性より女性の能力が低いという学者等のデータが示されている。地図の見方等の基礎知識の習得は勿論のこと、女性の客観的な体力、社会性、組織性に及ぶより広くより深いところでの「自己の登山力を知る」ことの議論がされ始めている。

女性委員会では、女性だけでも救急処置や搬出ができるような取り組みを進めている。

今、かつては女性やごく一部の限られた人々の問題とされてきた派遣社員やアルバイト等の雇用形態が、深刻な「格差」として広く社会の問題となるまでに拡大し、さらに介護や平和の問題等々、社会に目を向けなければことが多くなっている。

今後も、お互いに交流を図りながら、社会に目をむけ、登山者として一層の力量の向上を目指そう。

以下は1971年(昭和46年)以来取り組んできた主な事業等を拾いあげてみた。

- 1 兵庫県連盟女性会員のつどい
- 2 講演会・学習会・読書会
- 3 主婦のためのハイキング講座 1995年から女性のためのハイキング講座
- 4 女性の新しい会が誕生(上記「主婦のためのハイキング講座」受講者等が中心)
「HCあじさい」誕生 後日「ハイキングクラブレディバード」と「六甲ハイク」
「グループてくてく」「ハイキングクラブあすなる」「ハイキングクラブ徒歩徒歩」
- 5 兵庫県連盟女性交流山行
- 6 「既婚者のつどい」から親子ハイキングクラブ結成、「やまぼうし」への発展
- 7 海外女性登山隊 インドヒマラヤ CB12峰登頂
- 8 西日本女性交流集会等
- 9 全国女性会員のつどい
- 10 他団体との交流等

等々です。

(坂西)

《女性と登山の歩み》

年	活 動 内 容	参加者等	
1970年 (昭和 45)	第 2回学習交流集會にて「女性と登山」の分科會を設置		
1971年 (昭和 46)	第 6回總會にて婦人部設置(10月 31日)		
1972年 (昭和 47)	姫路登山の女性と交流會(1月 30日 於手柄山青年の家) 第 1回講演會「労基法を学ぼう」 5月 25日 於 芦屋市民會館 長野県登山の第 1回「女子登山研修會」に参加(6月 3日～4日) 県「母親大會」に参加 8月 6日 姫路市	5登山	21 不明 13 8
1973年 (昭和 48)	第 1回 雪上技術訓練と講習會 3月 氷川 長野県登山の第 2回「女子登山研修會」に参加(6月 1日～2日) 於 駒ヶ根市 県「母親大會」に参加 7月 29日 於神戸市 第 1回「県連女性會員の集い」 9月 1日～2日 於	6登山 5登山 1登山 16登山	19 13 3 96
1974年 (昭和 49)	講演會「社会主義國の婦人たち」 1月 19日 - 世界青年学生平和友好祭に参加して - 報告者 坂田美保子氏(長野県労 第 2回 雪上技術訓練と講習會 3月 20日～24日 氷川 学習會「母親大會のあゆみ」 7月 15日 於芦屋市民會館 講師 山本 マサ氏(県母親婦人連絡協議會) 第 2回「県連女性會員の集い」 - 女性の結婚と社会 - 8月 31日～9月 1日 他県の登山と交流會 高松登山 於高松市 11月 10日～11日	11登山 6登山 11登山 兵庫から	113 18 37 151 6
1975年 (昭和 50)	第 3回 雪上技術訓練と講習會 3月 氷川 講演會「戦後日本女性の歩んだ道」 講師 伊藤 康子氏(日本福祉大學講師) 講演會「母性保護と優性保護法改悪」 講師 森下 温子氏(高教組婦人部長) 第 3回「県連女性會員の集い」 - 女性の職場と賃金 -	17登山 14登山	不明 90 84
1976年 (昭和 51)	第 4回 雪上技術訓練と講習會 3月 氷川 第 1回女性と登山についての全国討論集會 7月 10日～11日 於西宮市民會館 西宮勤勞會館 第 1回既婚者の集い11月27日	全体 17登山	36 417 33
1977年 (昭和 52)	第 5回 雪上技術訓練と講習會 3月 18日～21日 氷川(今回で廃止) 読書會 5回 「人形の家」或る女「典子の生き方」真知子「伸子」 第 2回女性と登山についての全国討論集會 9月 17日～18日	17登山 述べ	36 81 68
1978年 (昭和 53)	講演會「働くってどういうこと」 1月 13日 講師 柴田 悦子氏 婦人部山行「北鎌尾根」 5月 3日～5日 親子ハイキング「芦屋市青少年野外センター」 9月 3日	17登山 4登山	77 4 66
1979年 (昭和 54)	海外登山 インドヒマラヤ「CB12」 7月 26日～9月 3日 第 3回女性と登山についての全国討論集會 於福岡市 9月 23日～24日	4登山 15登山	5 33
1980年 (昭和 55)	第 2回既婚者のつどい 1月 27日 講演會「あゝ野麦峠からみた今の生活」 2月 1日 講師 山本茂美氏(作家) 於 西宮市民會館 第 1回 女子マラソン 武庫川河川敷 1月 27日 学習會「眞の男女平等とは」 3月 28日 講師 森下 温子氏(高教組婦人部長) 親子ハイキングバス 既婚女性が春と夏に取り組む	22登山他	433 19
1981年 (昭和 56)	親子ハイキングクラブ結成 県連女性合同合宿 海谷山塊 5月 第 4回女性と登山についての全国討論集會 6月 13日～14日 読書會 5回 助言者 高山智津子氏(児童文学研究者) サンダカン八番娼館「花埋み」華岡清州の妻「暁咲きの梅」石狩平野	述べ 述べ	25 73 68
1982年 (昭和 57)	講演會「パール其自然と人々」 2月 20日 講師 岩村 昇氏 第 72回国際婦人デー兵庫県集會 読書會 3回「キューポラのある町」 助言者 高山 智津子氏 石狩平野	28登山 述べ	280 20 22
1983年 (昭和 58)	学習會「自分らしい生き方を搜して」 講師 高山 智津子氏 第 5回女性會員のつどい 講師 早船 ちよ氏(作家) 5月 14日～15日 於神戸市清月荘 女性山行「谷川岳」 9月 17日 第 5回全国女性と登山についての全国討論集會 於 東京 第 1回主婦のためのハイキング講座 受講者 阪神 40人神戸 20人 (後日「HCあじさい誕生」)	12登山 述べ 8登山 9登山	32 239 14 22 60

年	活 動 内 容	参加者等	
1984年 (昭和 59)	6月の総会にて「婦人部」から「女性委員会」に名称変更 学習会 5回開催 7月3日～4月12日 近代日本女性史」講師 高山 智津子氏 (児童文学研究者) 講師 柴田 悦子氏 (大阪市大教授) 読書会 4回 7月26日～4月7日 講師 脇山 靖子氏 (県婦人協議会副会長) 文学にみる女性の生き方」平家物語」樋口一葉の生き方」眞智子」 第2回主婦のためのハイキング講座 受講者 阪神40人神戸20人 (後日「グループ てくてく誕生」)	述べ 15労山	47
1985年 (昭和 60)	学習会 歴史をつくる女性たち」 第3回主婦のためのハイキング講座 10月開催 受講者 (「あすなる」連盟に加盟) 女性交流山行 蘇武岳」10月	12労山 神戸地域 阪神地域 14労山	22 15 32 37
1986年 (昭和 61)	第6回女性会員のつどい 1月18日～19日 女性の自立と山行を続けるために」講師 柴田 悦子氏 (大阪市立大学教授) 女性交流山行 白馬岳」7月25日～28日 第4回主婦のためのハイキング講座 受講者 阪神22 神戸18 学習会 職場と生活と山」10月3日 主婦のハイキングクラブ交流会 8月23日及び12月20日 (あすなる労山加盟) 女性と登山全国集会	4労山 述べ3労山	118 9 40 29 34 46
1987年 (昭和 62)	第5回主婦のためのハイキング講座 女性交流山行 藤原岳」10月24日～25日	受講者 10労山	10 18
1988年 (昭和 63)	第7回女性会員のつどい 1月30日～31日 講演 「人間らしさを見つめて」講師 高山 智津子氏 女性交流山行 藤原岳」2月19日 岡山県労山との女性交流山行 西方ヶ岳」4月7日～8日 近畿ブロック女性交流山行 和佐又」7月16日～17日 第1回女性交流集会と登山 (全国連盟主催) 栗駒山」10月9日～10日 女性交流山行 御在所岳」10月22日～23日 読書会 「花衣ぬぐやまつわる」 第6回主婦のためのハイキング講座 10月開催	2日述べ 3労山 5労山 3労山 10労山 10労山	160 4 10 7 1 22 5 不明
1989年 (平成元)	読書会 魂はネルソンと共に」講師 小林信次郎氏 (大阪工大教授) ひなまつり集会 3月3日 全国女性会員交流登山 岩菅山」9月22日～23日 第7回主婦のためのハイキング講座	3労山 9労山 6労山 受講生	8 21 11 3
1990年 (平成 2)	第8回女性会員のつどい 1月27日～28日 田部井 淳子さん 講演の夕べ」講師 田部井 淳子氏 第8回主婦のためのハイキング講座 (後日「ハイキングクラブ徒歩徒歩」誕生) 第3回近畿ブロック女性会員の交流登山 氷ノ山」11月17日～18日	2日述べ 受講者 10労山	451 23 27
1991年 (平成 3)	講演会 本当の豊かさとは何か」講師 寿岳 章子氏 (1月26日) 県連女性交流山行 雪山ハイク 若杉峠」3月10日 第9回主婦のためのハイキング講座 県連女性交流山行 御在所岳」10月26日～27日	19労山 11労山 受講生 13労山	103 49 23 31
1992年 (平成 4)	第9回女性会員のつどい 1月30日～31日 テーマ「イキイキと山をめざして」 第10回主婦のためのハイキング講座 (10月開催) 近畿ブロック交流山行 「八丁平」 11月14日～15日	15労山 受講生 兵庫から	121 13 23
1993年 (平成 5)	講演会 私の歩いてきた道」1月30日 講師 坂倉 登喜子氏 (エーデルワイス会長) 雪山 女性山行 氷ノ山 三の丸」3月19日～21日 第11回主婦のためのハイキング講座	受講生	143 17 29
1994年 (平成 6)	第10回女性会員のつどい 1月30日 テーマ「生きる楽しさを見つめて」講師 渡辺 一枝氏 (作家) 県連女性交流山行 蝶ヶ岳～常念岳」8月26日～29日 県連秋山女性交流集会と登山 「比良山」10月22日～23日 岩登り体験会 11月3日 蓬萊峡」 全国女性交流集会と登山 白山」10月9日～10日 (全国139人) 第12回主婦のためのハイキング講座 9月～12月	3労山 12労山 4労山 受講生	98 9 6 22 7 7

年	活 動 内 容	参加者等	
1995年 (平成 7)	第 1回女性のためのハイキング講座 9月から10月 (名称変更 旧主婦のためのハイキング講座) 福岡県連女性委員会と近畿ブロック女性委員会との交流山行	受講生	29 6
1996年 (平成 8)	第 11回女性会員のつどい 2月18日 テーマ「生きることが楽しくなる山歩き・山登り」 講師 小倉 薫子氏(山の会 ハイジ 主宰者) 第 2回女性のためのハイキング講座 (講座 3 実技 1)	24労山 受講生	93 16
1997年 (平成 9)	第 3回女性のためのハイキング講座 (講座 3 実技 1) 9月～10月 第 3回近畿ブロック女性会員の交流山行 雨飾山 10月3日～5日 (全体 21人) 県連女性交流山行 比良山 8月26日～29日	受講生 兵4労山 7労山	27 7 16
1998年 (平成 10)	第 12回女性会員のつどい 2月18日 テーマ「女性のからだと登山」 講師 大神田 伊智美氏(労山会員) 第 4回女性のためのハイキング講座 (講座 3 実技 1) 9月～10月実施	22労山 受講生	112 16
1999年 (平成 11)	県連女性雪山交流山行 比良山 2月20日～21日 第 5回女性のためのハイキング講座 (講座 3 実技 1) 西日本女性交流集会 11月6日～7日 (全体 274人)	8労山 受講生 兵20労山	14 23 75
2000年 (平成 12)	西日本女性交流山行 三嶺 11月3日～5日 県連女性雪山交流山行 比良山 2月26日～27日 兵庫県女性交流集会 摩耶自然の家 4月14日～15日	2労山 4労山 12労山	7 8 20
2001年 (平成 13)	講演会 「ピッケルをもったおまわりさん」 11月17日 講師 谷口 凱夫氏(元富山県警山岳救助隊長)		170
2002年 (平成 14)	県連女性交流山行 和佐又～笹の窟 2月16日～17日 兵庫県女性交流山行 徳本峠～霞沢岳 8月22日～25日 県連女性交流山行 荒島岳 10月19日～20日	8労山 7労山 6労山	16 12 15
2003年 (平成 15)	県連女性交流山行 鴛海山 9月12日～15日 講演会 山野井 妙子さん 講演会 11月8日 講師 山野井 妙子氏(植村直己賞受賞者) 県連交流集会 1月19日 分科会 女性委員会担当 自立した登山をしていますか	12労山 28労山	27 153
2004年 (平成 16)	近畿ブロック女性交流山行 比良山 3月20日～21日 県連女性交流ハイク 東床尾山～西床尾山 5月23日 第 6回女性のためのハイキング講座 再開 (講座 3 実技 1) 県連女性交流山行 立山 5月中止 (トレーニング 6回実施) 赤坂山へ	4労山 8労山 受講者 5労山	4 21 19 5
2005年 (平成 17)	講演会 「山は逃げないけれど 年齢は待ってくれない」 11月26日 講師 渡辺 玉枝氏(植村直己賞受賞者) 兵庫県女性交流山行 策ガ岳 9月23日～25日	労山 6労山	222 7
2006年 (平成 18)	第 7回女性のためのハイキング講座 (講座 3 実技 1) 3月 40周年記念ハイキング講座にて 搬出訓練 近畿ブロック女性交流山行 尾瀬 谷川岳 10月19日～23日	受講者 12労山 3労山	27 27 6



女性のための
ハイキング講座

兵庫労山と国民平和大行進

日本勤労者山岳連盟が誕生したその日から「故郷の山岳自然を守ろう」「核戦争は最大の自然破壊である」と、労山が「緑と平和を愛する」団体であることを内外に明らかにしてきた。核兵器廃絶の運動は1954年3月1日に静岡県焼津漁協所属のマグロ漁船「第五福竜丸」が南太平洋にて操業中、アメリカが行った「ビキニ環礁水爆実験」の死の灰を被曝して、乗組員の久保山愛吉氏が亡くなったことで爆発的な怒りとなり日本のいたるところで「核兵器をなくそう」の署名運動が展開されました。

これを機に世界で唯一、核兵器の残酷さを知る日本で「世界の何処にも3度ゆるすまじ原爆を」の声が高まり「原水爆禁止世界大会」が開催されるようになった。

1958年夏、広島平和公園から東京で開催される「原水爆禁止世界大会」の会場に向けて「国民平和大行進」が開始され現在に至っている。

兵庫労山がこの行進に参加するようになったのは1984年に「神戸みなと労山」が単独の会として県内通し行進を行った翌1985年からである。この頃の国民平和大行進はすでに現在のように、都道府県すべてを繋ぐコースになっており、礼文島から沖縄から東京からと、全国各地から広島、長崎を目指すようになっていた。

兵庫労山は「県内を行進団が通過する日、すべてで県労山の旗を翻す」を目標にして各会に行進参加を訴えた。初期の頃は「平和と登山」を机上で学びながら「平和の学習会・長崎、広島を記録した映画鑑賞」歩いた。

労山全国連盟がこの行進に参加するようになったのは、1986年の2月に行われた全国連盟定期総会の場での兵庫労山の活動報告が決定的な役割を果たした。

この年の国民平和大行進には全国連盟の【核廃絶】旗と【平和と登山】幟が東京からヒロシマまでのコースに毎日翻ることになった。

それからの兵庫労山は、全国連盟の「残そう平和の足跡を」の呼びかけにこたえて「平和と登山」という特別委員会を組織し、担当者を置き、「守ろう平和と緑」のゼッケンを作成し、各会の受け持ち日の指定、責任会の指定、というように体制を整え、東京～ヒロシマ間では最長の220キロ、1日の歩行距離も20キロを越し、兵庫県を歩けば、東京・ヒロシマ間を完走できる、の神話が生まれるくらいの過酷なコースを10日間繋げて岡山の山仲間を引き継ぐ、を21回繰り返してきた。

この間、数々のエピソードが語り継がれてきた。県労山で初めて10日間を完走したのは大学会長（当時）の定年退職記念であった。女性が完走したのは2人で、うち1人は今もアルペン芦山で活躍されている。完走の最高齢は北須磨山の会の富樫氏でこの方は5年連続の完走である。神戸みなと労山は10日間会の旗を絶やすことがなかった、全盲の山仲間が29キロを完走した、1歳のときから母親会員に背負われてから中学生になるまで毎年参加した北摂山の会の二世、会員の70%が毎年参加するという「ハイキングクラブあすなろ」など尽きることはありません。

国民平和大行進は「核戦争阻止・核兵器廃絶」を訴える世界の平和愛好者から尊敬されている夏の風物詩である。2007年は「歩きはじめて50回目の夏」になる。 (阿部)

阪神・淡路大震災

1995年1月17日午前5時46分マグニチュード7.3の淡路島北部を震源とする大地震は、阪神地区をも巻き込んだ大都市直下型地震として世界中のトップニュースとなり、私たち兵庫労山の会でも3名が死亡、18もの会事務所が半壊、全壊あるいは焼失などにより使用不可能となった。また、多数の会員ご家族が亡くなられたり、怪我を負われた。

兵庫労山各会の被災状況は資料の通り取り纏められたが、実際の被災状況は数字で表されている以上のものがあった。

当時の理事長の「県外の家族、友人には連絡が取れるのに、近くに住んでいる山仲間と連絡が取れない、特に阪神地区からは神戸地区の会員の消息すらつかめない日々が続き、かなり焦っていた中で、県連事務所のあった三宮の琴緒町のビルは無事だと知り、安堵した。そんな中、東灘以西の状況を知るため、歩いて三宮まで何度



が行ったことや、理事長として、この事態をどう收拾していくかの指示を発揮できず、ただただ歩き回っていたような気がする。」との話の通り震災直後は被害の大きい小さいはあったが、兵庫労山の役員も全て被災者で、それぞれが奔走していた。

全国連盟は地震の翌日の18日に「阪神大震災救援対策本部」を設置し、対策本部長名で「兵庫の仲間たちへの救援募金を訴えます」の呼掛けが出され、全国の仲間から1000万円を越える救援募金が寄せられた。救援募金は会事務所を焼失・全壊や半壊、立退きを迫られた会に再建費用を、共同装備を失った会には損失補填額を分配するなど救援募金を活用させていただいた。

そのような中でも、2月19日には各会代表者会議を開いて各会の被災状況や活動の再開の目途などについて情報交換を行い、既に活動を始めている仲間たちの報告や全国連盟役員の皆様からの激励を受けた。

また、私たちのホームグラウンドである六甲山の登山道の調査山行を各会で分担して行い、各登山道をA:登山道の崩壊は軽微、または現状維持。B:通行に注意を要する。C:危険(家族連れのハイキングには不適當、経験者で少人数で行動)D:通行止めにする必要がある。との4つの分類を行い、震災の被害状況の情報が不足していた登山道を利用する目安として機関紙を通じて情報を発信した。



3月に予定していた第13回タイムトライアルは中止し、参加費は登山道復旧工事のため、神戸市に100万円、兵庫県、西宮市、芦屋市、宝塚市に各々20万円の計180万円を寄付した。(1995年6月18日の第32回定期総会において報告済み)

(田中)

『当時の「兵庫労山」に掲載された被災状況』

兵庫労山各会被災状況 (兵庫南部地区)

会名	会員の被災状況	事務所	装備
伊丹労山	死亡(0) けが(傷2) 全壊(2) 半壊・一部損傷(5) 避難生活(2)	損傷/立ち退き	無事
扇橋山の会	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(1) 避難生活(0)	無事	無事
三浦労山	死亡(0) けが(0) 全壊(2) 半壊・一部損傷(2) 避難生活(4)	損傷/立ち退き	無事
御堂山E-1	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(0) 避難生活(1)	---	無事
扇橋山	死亡(1) けが(0) 全壊(1) 半壊・一部損傷(1) 避難生活(0)	無事	無事
吉尾山岳会	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(0) 避難生活(1)	損傷/立ち退き	無事
西京労山	死亡(0) けが(1) 全壊(3) 半壊・一部損傷(4) 避難生活(2)	全壊	60%無事
山崎山岳会	死亡(0) けが(0) 全壊(10) 半壊・一部損傷(4) 避難生活(3)	全壊	80%無事
中心の山	死亡(0) けが(1) 全壊(2) 半壊・一部損傷(5) 避難生活(2)	損傷/立ち退き	無事
出羽山岳会	死亡(0) けが(10) 全壊(47) 半壊・一部損傷(37) 避難生活(23)	無事	無事
山の会かむら	死亡(0) けが(0) 全壊(4) 半壊・一部損傷(19) 避難生活(3)	無事	無事
西宮北の労山	死亡(0) けが(1) 全壊(3) 半壊・一部損傷(2) 避難生活(4)	---	無事
やまぼうし	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(3) 避難生活(1)	---	無事
山あひだい	死亡(0) けが(1) 全壊(3) 半壊・一部損傷(3) 避難生活(3)	---	無事
玉置山の会	死亡(0) けが(0) 全壊(2) 半壊・一部損傷(4) 避難生活(4)	損傷/立ち退き	無事
アソビの山	死亡(1) けが(1) 全壊(9) 半壊・一部損傷(36) 避難生活(3)	全壊	50%無事
東灘労山	死亡(1) けが(0) 全壊(4) 半壊・一部損傷(2) 避難生活(4)	損傷/立ち退き	無事
草部山岳会	死亡(0) けが(1) 全壊(6) 半壊・一部損傷(1) 避難生活(6)	損傷/立ち退き	80%無事
神戸西山の会	死亡(0) けが(1) 全壊(0) 半壊・一部損傷(3) 避難生活(3)	全壊	50%無事
神戸山岳	死亡(0) けが(0) 全壊(5) 半壊・一部損傷(3) 避難生活(5)	---	無事
神戸中央の山	死亡(0) けが(1) 全壊(3) 半壊・一部損傷(4) 避難生活(4)	損傷/立ち退き	無事
みなと労山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(2) 避難生活(3)	無事	無事
神戸労山	死亡(0) けが(0) 全壊(1) 半壊・一部損傷(7) 避難生活(7)	無事	無事
山の会アリス	死亡(0) けが(0) 全壊(1) 半壊・一部損傷(5) 避難生活(8)	損傷/立ち退き	無事
新が丸の会	死亡(0) けが(0) 全壊(1) 半壊・一部損傷(12) 避難生活(13)	全壊	全壊
西神戸山の会	死亡(0) けが(0) 全壊(5) 半壊・一部損傷(7) 避難生活(15)	全壊	全壊
加藤山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(2) 避難生活(0)	損傷/立ち退き	ほぼ全壊
北須磨山の会	死亡(0) けが(0) 全壊(2) 半壊・一部損傷(1) 避難生活(3)	損傷/立ち退き	ほぼ全壊
垂水山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(4) 避難生活(0)	無事	無事
垂水山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(0) 避難生活(0)	---	無事
あひだ	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(4) 避難生活(2)	---	無事
明石の山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(1) 避難生活(1)	無事	無事
アソビ山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(1) 避難生活(1)	---	無事
FC徒歩徒歩	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(0) 避難生活(0)	---	無事
北神山の会	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(2) 避難生活(0)	---	無事
彦路山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(6) 避難生活(0)	損傷/立ち退き	無事
姫路山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(0) 避難生活(0)	---	無事
姫路山	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(0) 避難生活(0)	---	無事
南畑山岳会	死亡(0) けが(0) 全壊(0) 半壊・一部損傷(0) 避難生活(0)	---	無事
合計	死亡(3) けが(20) 全壊(113) 半壊・一部損傷(203) 避難生活(170)	事務所を失った会/18	

全国の労山の仲間の 励ましと激励を受けて

1月17日のあの地震直後から、兵庫県内間での連絡がぶつ切り切れてしまいました。前日まで一緒に活動していた会の連盟の仲間の安否が全く解らない、つかめない・・・我々だれもが抱えた不安でした。

しかし、その直後から東京の全国の事務局を通じて、そこに集まった情報で徐々にではありますが個々の安否を知ることができました。全国事務局からは地震直後直ちに兵庫に対して震災救援対策をとる内容の文書を全国各地に流されました。また1月20日に京都で緊急近畿ブロック会議が開かれ、近畿の仲間が集まってくれました。東京からも2名の理事の方が駆けつけてくださり、労山全体でどんな救援活動をするのかが話合われました。それ以後、近畿は大阪労山事務所を兵庫労山の会員、会の状況をつかむ拠点として一週間昼も夜も事務所に詰めて、入ってくる情報の処理や電話連絡を行ってくれました。こうして、県内では連絡の取れなかった私たちは、全国事務局、大阪労山の事務所を通じて各会の被害状況や会員の現状をつかんでいくことができました。また近畿のメンバーは実際に兵庫に入って各会の事務所のある地域を歩いてくれたり、1/29の連盟事務所の整理にも手を貸してくれました。その間、全国各地の仲間からは我々の安否を気遣う電話や、はげまし・激励の文書が寄せられました。物資も届きました。

全国事務局が呼びかけ、全国各地で取り組まれた震災に対する救援募金は4月末で1000万円を越える金額になりました。これはいかに多くの方が震災に遭った私たちの事を心配してくれているかを物語っています。また、長野や京都の仲間からは山での支援を受け、5月に山での一時の楽しい交流を行う事もできました。全国各地からは以後も、装備への支援の申し出や、長期にわたっての支援についての声も届いています。

私たちは大きな震災に遭い、肉親を失い、仲間を、家を、事務所を失い、大変厳しい状況に追い込まれました。生活するのも大変な状況もありました。また職場を失い、生活の基盤となる収入の道を絶たれた人もいます。それぞれ大変な状況の中ではありますが決して一人ではない、そばに、日本中各地に我々を気遣い、支援してくれる人々のいる事を忘れないで活動して行きましょう。

1月以後、会員の安否を確認する作業から始まった私たちの震災後の活動は5カ月たつて、なんとか山にも行ける状況になってきました。しかし被害の大きかった地域の会では再建に大変苦勞があります。同じ兵庫労山でも状況に差が見られてきています。全国のみんなが気遣ってくれたように、兵庫の中においても、苦勞の多い会員や会にまわりのみんなで気遣い、力を貸して行きましょう。

全国の支援に応えることは、兵庫労山の全員が元気に活動できるようになることだと思います。力を結集して再建めざして活動して行きましょう。

兵庫労山労山会総会議案書5/1

兵庫労山40周年記念行事について

兵庫県勤労者山岳連盟

理事長 喜多伸介

長いようでしたが過ぎて見れば早いものです。また、この40年は小生の青春時代(昭和43年就職)から定年までの時とほぼ同じ時期になりました。

1966年(昭和41年)当時20歳代の若者が阪神間に労山を作り、その西宮労山・神戸労山・宝塚労山・尼崎労山の4つの会が連盟を結成したのです。

全国でも連盟が結成され、これを受けて兵庫でも結成されました。大阪や京都もこの時期に結成されたと聞きます。

兵庫労山では、全国連盟の趣意書を、さらばすべての登山愛好者・自然に親しみたいと願っている人の要求に応えることは労山の社会的使命である。自然を守ること、平和の下でしか登山は発展しない」と深め活動を展開してきました。阪神・神戸を中心に淡路・但馬・播磨・北摂さらに親子・女性・ハイキング・障害者等地域的な会や分野別な会が結成され、49の団体を擁する連盟に成長しました。

この間、阪神大震災により、連盟および各会でも大きな被害を受けました。

しかし、全国の仲間の大きな励まし支援があったことを忘れることができません。この紙面を借りてお礼申しあげます。本当にありがとうございました。

そして、2006年の連盟創立40周年を迎えるのです。

しかし、残念なことは、この40周年にあたる2006年から2007年には4人の仲間を、その前の2002年～2005年にも4人の仲間を失い、連盟結成以来40年間に39人も多くの仲間を失ったことを忘れることができません。労山設立の趣旨「山岳遭難事故をなくす」を改めて認識し、事故防止活動を続けなければなりません。事故が続き、記念行事の実施の是非についても検討しましたが、事故をしっかりと見すえ、事故防止活動に全力をつくすということを行うということで記念行事も実施してきました。

さて、40周年には、「現在の仲間・過去の仲間を含めて、仲間や会の成長を共に祝い将来の発展を目指すものにする」という基本



氷ノ山集中登山の交流集会



氷ノ山交流会で感謝状を

的な考え方を中心に、行事ごとに実行委員会を結成し、その成功を目指しました。

まず、プレ行事として、2005年11月26日に女性委員会主催による「渡邊玉枝さん講演会」(女性のエベレストのサミッター)、女性委員長の紹介とコメントの発表がありました。それぞれの紹介コメントが出席者に感動を与え、女性が兵庫を支えてきたことが実感されたのではないかと考えられました。

次に、自然保護委員会の努力により、3月23日に国土交通省および地元自治会等の協力を得て、住吉川沿いの水車小屋跡付近「労山の森づくり」の植樹を行いました。地

元の積極的な協力は、以後の草刈活動にも続き、さらに今年2月24日には第二回目の植樹活動と繋がり、自然保護運動の新たな方向を生み出したものになりました。

本格的な40周年行事の第一は、5月28日には氷ノ山の集中登山大会でした。これは、兵庫労山が大きく発展した自然保護運動の原点である「氷ノ山へ集おう!」という趣旨でこの場所を決めました。さらに多くの仲間と祝おうと、その前日には、阪神・西宮・神戸・播磨地区から合同利用による交流バスハイキングを行い、そして、地元関宮町に集合し、夜には、350人を超える大交流集会を行いました。玉井会長・大学名誉会長のあいさつのあと、地元からの歓迎の言葉を受けました。そして、氷ノ山の自然を守る活動でお世話になった元民宿「てるや」の田中さん、氷ノ山の遭難でお世話になった民宿「きくや」の長村さんに感謝状を贈りました。そして氷ノ山の自然を守る活動を振り返り、また、氷ノ山の遭難を偲び、古い仲間と新しい仲間が一同に会し、語り合い、大合唱による交流を行いました。この

交流会を守り立ててくれたバンドもありますが、3ヶ月以上もかかって作成された記念歌集が花を添えました。外は雨が激しく降っていましたが、体育館は大きく炎が燃え盛る貴重な交流会ができたと思います。(しかし残念なこ



三田での分野別交流会 & 集中ハイキング

とは、大変お世話になった民宿「きくや」のご主人の長村道雄さんが、今年2月に亡くなったことで、ご冥福を祈ります。)

9月24日には、記念講演、記念式典そして懇親会を行いました。記念講演は、鹿屋体育大学教授で自らもハイレベルな登山を実証されている山本正嘉氏から登山・ハイキングの体力の向上等の有意義な話をいただきました。記念式典はロゴマークの発案者(東灘労山 橋本さん)の表彰に続き、連盟の歴代会長・理事長の紹介とコメントをいただき、その後の懇親会は、全国・近畿ブロックの仲間も含めて懇談を行ないました。

そして、11月11日～12日には、伊丹市立三田野外センターにて「分野別交流会&集中ハイキング」を行いました。これは当初手軽に誰もが参加できる日帰りの取り組みを六甲山でしようとして予定しましたが、適当な会場がなく、この地での行事となりました。道場や三田からハイキングをしながら、集合しました。そして、ハイキング・女性・機関誌・自然保護の4つの分科会で討論をし、それぞれの分野で交流を深めました。そして、それぞれごとに懇親会を行いました。特筆すべきはこの懇親会の食べ物を実行委員会が準備しました。玉井会長もその先頭で関東煮の煮炊きをしていました。翌日は全体集会で、出席者による成果の確認を行い、解散後は、自然保護委員会のお世話で、羽束山を越えてのハイキングをしながらの下山となりました。

そして、40周年行事の最後がこの記念誌の発行です。単に冊子によるものだけでなく、永久保存を意図し、さらに必要な部分の取出しができ、今後の発展の資料にしやすいという目的でCD-Rを利用した電子機器による記念誌も発行することにしました。しかし、決してすべてを網羅したものではありません。紙面の関係・資料確認等のため不足している部分もあることをご承知ください。

各会・各クラブにおかれましては、40年にわたる兵庫の労山活動を収録した、この記念誌が新たな発展へ向けての原動力となることを願っています。

最後に、震災後の事務所の移転や資料保存が不十分という悪条件の中、何度も会議を重ね発行にこぎつけていただきました編集委員のご苦勞には心からお礼申し上げます。



- 兵庫労山の夜明け -

連盟創設前史と創設のころ

西宮明昭山の会会長 原水章行

勤労者山岳会の結成と時代の背景

まず勤労者山岳会(労山)がいつどのように生まれたのか、40年前という当時のことを知る会員も少なく、はるか遠くなったこの頃では、今後振り返る機会も一層少なくなると思われるので少し触れたい。

1960年5月、東京で伊藤正一氏(北ア・三俣小屋など経営者)が中心となって全国組織として「勤労者山岳会」(後に東京勤労者山岳会)が結成された。これは「日本山岳会」あるいはイギリスの「アルパインクラブ」のような全国的に単一の組織をイメージしたものであろうか。当時出された結成趣意書の呼びかけ人には、かの「日本百名山」の深田久弥氏、「花の百名山」の田中澄江さんらをはじめ、当時の進歩的な学者・芸術家・文化人・政治家が名を連ねている。

「勤労者山岳会」はそれまでの有閑層や学生などにとって代わって当時すでに主流となりつつあった勤労登山愛好者の間に大きな反響をよび、結成間もなく1千名の会員を擁したといわれている。しかしこれもつかの間、1962年には活動が停滞し、一挙に200人に減少してしまった。経験不足に加えて有能な組織者に欠けていたのであろうか。1960年といえば、いわゆる“60年安保改定闘争”のころである。安保闘争という国民的な盛り上がりの中で労働組合も総評を中心に、かつてなく結束が強まっていた。それまで下積みになっていた青年労働者が大いに発言力をもち、上下の格差が開いていた賃金も初任給が大幅に上がり、飢餓賃金からようやく脱却できようとしていた。ちなみにその頃私はすでに神戸の山岳会(岳連加盟)の会員であったが、初任給8000円くらいで就職、毎年の昇給がせいぜい数百円、山の装備は給料1万円そこそこのころで特大のキスリングが4,000~5,000円、今とは比べものにならない劣悪な国産登山靴が5,000~10,000円、おまけに2000円のLPを買ってしまうともはや食うや食わずの、生きて来たのが不思議なくらいのどん底生活である。山も一度遠出をすると後は借金返しに追われ、アルバイト(家庭教師)でようやく食いつないでいた。正業につきながら、新聞配達などのアルバイトに追われる職場の仲間も多く、まさに今日のワーキングプアの先輩であった。

政治的に追い詰められた政府・資本の譲歩であろう、安保闘争の後、給料は一挙に千円単位で大幅に上がった。このような社会情勢を反映して国民の消費生活が進み始めた。

3人寄れば山岳会

その前1956年には日本山岳会楨有恒氏らがマナスルの初登攀に成功、山の情報が発達し、勤労青年達の登山熱が燃え上がり、登山が流行した。職場や地域に山岳会が続々と結成された。「3人寄れば山岳会」という言葉も生まれたくらいである。それまでの「上流層・学生」から勤労者の登山に移ったのである。

田口二郎氏(甲南高校・東大山岳部OB、ジャーナリスト)がその著『東西登山史考』(岩波・同時代ライブラリー)でこのころの情勢について指摘している。「この(新しいスポーツ用品)産業を支えたのは戦後出現した大衆消費社会である。現代登山技術は大衆スポーツを地盤として新たに生まれた。大衆スポーツ社会の成立したところ、それは水が低きに向かうように流れた。現代登山技術を支えるのは伝統的な上流層、教養層でなく、広い勤労者である。新しい社会層が熱情的にそれを支えた」

「広い勤労者」「新しい社会層」とは、勤労青年のことである。中高年はやはり仕事と生活に追われ、蚊帳の外、山どころではなく、山はほぼ完全に若者の世界であった。中高年はその後の「高度成長政策」「所得倍増政策」に追いまくられ、現在のような「主婦と年金生活者」を主流とする中高年登山者の登場は、さらに15年後、経済的・時間的なゆとり・社会福祉が進み、登山の優秀な衣服や装備がさらに安価に入手できるようになるまで待たなければならなかった。思えば明昭が生まれた1975年頃がその端緒であろうか。

日本勤労者山岳連盟の結成

東京での「勤労者山岳会」結成の翌1961年には、「京都勤労者山岳会」が結成された。その後も全国的にいくつかの会がパラパラと作られた。

そのような情勢のもと1963年7月7日、ついに日本勤労者山岳連盟が結成され、画期的な一步を踏み出した。とはいえ伊藤正一氏からいただいた議事録によれば結成大会に出席したのは、東京、京都、横浜、松本、徳島など僅か5会、ほかに代表不参加として記載されているのは、木曽、金沢、福岡、東海地方など4会である。結局連盟結成当時に存在したのは9会に過ぎず、このうち何らかの形でその後存続したのは、東京・京都・福岡・松本など僅かに4会で、他はその後消滅した。

労山への胎動

私たちが、「西宮わかもの山岳会」(1965年に西宮勤労者山岳会に改称)を結成したのは全国連盟結成2カ月後の1963年9月7日である。これは近畿では京都労山に次いで2番目、全国でも10番目の会である。「彗星」のように出現したこの会は、彗星のように消え去らなかつたばかりでなく、県連創立の大きな推進力になった。西宮労山はどのように生まれたのだろうか。

安保闘争が一段落したころ、当時私が所属していた山岳会は鹿島槍ヶ岳の冬季バリエーションルートの登攀をねらって活動していた。私もそのメンバーに選ばれ、期するところがあった。しかし10月にルートの偵察に出掛けた先輩の1名が鹿島槍ヶ岳北俣本谷で遭難、それをきっかけにもろくも分裂崩壊してしまった。目標を失ってしまった私は、やがて職場の団結の一助にと職場で山岳会を作った。そのうちに職場外からも、山へ連れて行ってエ、と何人が参加し始めた。それならいっそ地域的に活動しよう、憧れの女の子もどしどし入れよう、と一杯機嫌で相談し合ったのが1963年の夏山(立山～劔岳～仙人池～阿曾原コース)の仙人池ヒュッテであった。

劔沢の劔山荘の主人から頼まれた身内の北海道の大学生の志鷹某君を仙人池ヒュッテに無事送り届けて、食い放題の歓待を受けて、クダを巻きながら会の名前も決まった。「西宮わかもの山岳会」であった。当時はいわゆる「わかものサークル」も多く、そのような名前が何の衞いもないほどわれ

われも若かった!?

兵庫初、2番目西宮での労山の結成

1963年9月7日、ついに「西宮わかもの山岳会」の結成に漕ぎつけた。会員募集のピラがどこからどこへまわったのか、当日集まったのは何と約40名、会場は20歳前後の若い男女の熱気が立ち込めた。不肖独身青年、張り切らざるを得ない。

この席上、私は「全国の山岳会と連帯して会を発展させよう」と日本勤労者山岳連盟への加盟を参加者に訥々と訴えた。その後早速伊藤正一氏に手紙を出し、日本勤労者山岳連盟の資料をお願いした。伊藤さんからは丁寧な手紙とともに前記議事録や規約・「よびかけ」が送られてきた。

日本勤労者山岳連盟の所在や伊藤正一さんを知ったのは、1963年7月に発行された同氏の著作「勤労者登山教室（新興出版社・真昼文庫）を偶然書店で見つけたからである。初歩の技術書ではあるが序章の短い行間に、登山の正しい大衆化とそれをばむ条件、英雄主義・逃避的登山と山岳至上主義のあやまり、官僚的登山組織の欠陥、などが指摘されていた。その中の一節、『登山は勤労者大衆のもの……より進歩したアルピニズムは、よりよき社会機構の中から生まれるもの……あなた

が山を愛するならば、この日本の社会にも目を向け、平和な住みよい社会であることも愛してほしい。そして登山の正しい大衆化のために力を出していただきたい』に、これや!と胸がふるえた。このような考えは勤労者山岳会の設立趣意書に簡潔に盛り込まれている。

山に行きたくても金も暇もなく、思うように行けない貧乏青年にとっては、それまでの「金持ちのお遊び的」登山界を何か手の届かない虚しさ、感じていた。新しい「登山運動」ともいうべき風の流れに心をゆさぶられた。

“西宮わかもの山岳会”の孤軍奮闘

さて「西宮わかもの山岳会」結成後、張りきって早速全国連盟に加盟を申し込んだ。しかし東



県連結成を伝える当時のニュース

京からはナシのつづて、会員にさんざ宣伝した手前、引っ込みがつかない思いであった。

年が明けてようやく東京勤労者山岳会(「勤労者山岳会」が改称)の事務局らしい人からハガキが1枚舞い込み、秋に穂高で遭難者を出し、その処理に追われていたと釈明されていた。しかも1,000名はいると聞いていた東京労山会員は「ただ今50名」とあった。ともあれ1964年2月から加盟したものの、機関紙もなく、連絡も交流も皆無、連盟は無いに等しい有り様であった。こうなったら自分たちでやるしかないと思腹をくくった。

今日では普通になっている会の運営組織や方法、例えば総会、運営委員会、専門部、集会、各種講習会、会報、サークル活動、登山バス、スキーバス、などはこのころから基本をつくったといつてよい。モデルは何もなく、すべて自分たちで考えた。今でこそ登山バスやスキーバスなどは、ツーリストをはじめ盛んだが、当時はどこもやらなかった。同じ山岳会仲間からも、バスで山へ行くの?、とびっくりされた。だから参加者はいくらでも集まった。登山バスの効用は会員募集と財政活動であった。参加者が若いので初心者でも体力的に心配なく、バスの中ではコーラスやゲームで大騒ぎ、これがまた大変な人気であった。

会を作ってから山の技術面などは、山岳会時代の経験が役に立った。会の運営面では少数のリーダー(リーダー会)中心の当時の山岳会の運営を反面教師としながら、労働組合やサークルの民主的な運営の経験を大きくとり入れ、会員の要求や意見が幅広く反映されるように運営委員会をつくった。会が彗星のように消え去らなかつたのは、技術面で当時の山岳会の伝統を引き継ぎながら、組織面では従来のボス支配的な山岳会のをやめ、民主的な運営を取り入れたことにある、と思っている。

全国連盟のリニューアル・スタート

1965年も近くなって時代は急速に動きはじめていた。勤労青年の間での登山がますます盛んになり、山岳会やグループ、大学でも大規模なワングルが次々と生まれた。今の明昭でもこのころに登山をしていた方、ワングルで活躍した方がそこそこの年になって、「夢よ、もう一度」と入会する方も多い。記憶のある方も多いと思うが、休日の前夜の国鉄大阪駅には、「ちくま」など夜行列車を待つ登山者の列が蛇のうねりのように何重にもできた。列車は座席の下にももぐりこみ、通路ばかりかデッキも満員で、われわれもデッキに座り込んで、早朝現地に着くころには「トリス(ウイスキー)」が何本かカラになり、朝っぱらからチドリ足で登って行くこともあった。

勤労者山岳会も全国あちこちで結成の動きが現れた。それらの多くは、登山技術でも組織運営でも手腕があり、また熱意のある幹部が中心になっていた。

1964年、東京でも従来の東京労山に次いで南部地域に、「南部山岳会」が結成された。それとともに南部山岳会からわれわれの所にも美しく手なれた会報が送られてきた。その会報からは南部山岳会がやがては発展的に解消して各地域に新しい会を組織し、東京都連を確立し、全国連盟を強化しようとの展望がわれわれにも伝わり、大いに励まされた。

南部山岳会の大きな働きもあって、65年8月に上高地で「第1回全国登山祭典」が開かれることになり、これと併せて全国連盟第2回総会が開かれることになった。会場は上高地の奥小梨平であった

これに向けて、「西宮わかもの山岳会」は6月に会名を「西宮勤労者山岳会」に改称した。私も30歳を超え、「わかもの」でもなかりと気恥ずかしくなっていたので胸をなでおろした。

数百の会、数万の会員を掲げる

上高地祭典には西宮労山からも数人が参加した。太郎平から黒部五郎、槍へ縦走、槍沢をかけ下ったの参加であった。会場にはすでに大勢の若者たちが集まり、それぞれの会旗が翻っていた。各会が掲げる会旗は色・デザインともバラバラ、われわれの旗もその日の青空のように目の覚めるような空色で、当時は旗の色もマークも今日のように統一されていなかった。

総会とはいえ正式の代表は少なく、10指にも満たなかった。近畿では京都と西宮だけ、大多数は労山に関心をもち各地で結成をもくろむオブザーバーで、参加者は22都道府県の91人であった。これら大勢のオブザーバーに取り囲まれての熱気のこもる総会は印象的で今もまぶたに甦る。

バンガローでは、松本労山といっしょで、夜を徹しての「自主交流」であった。どのバンガローもそうであったろう。それでも翌日の分散会では、皆ケロリとして夢中でしゃべりあっていた。若くエネルギー、かつ情熱的であった。

この総会の最大の成果は「数百の会、数万の会員」を打ち出し、「趣意書」の精神に基づいて勤労者山岳会(労山)を拡大強化する方針を打ち出したことである。この総会と総会後に開かれた交流会で会員100名をこえて活発に活動していた西宮労山は「創意的かつ情熱的」と評され、われわれも胸を張って活動を紹介した。

燎原の火のように

この総会・登山祭典をジャンプ台に労山は燎原の火のように全国に燃えひろがり始めた。以後核となった南部山岳会など東京と近辺の会を中心に事務局が生まれ、連盟としての活動がスタート、組織整備がはかられた。事実上の連盟発足といってよからう。

65年11月には第1回登山学校が富士山で開かれ、谷川岳で遭難死された吉尾弘会長(当時東京都連会長)がコーチをしている。これには西宮労山からも受講生を送った。66年2月には初めての機関紙「全国労山」が創刊された。全国連盟も全国の登山愛好者の熱意に支えられ、大きく前進しようとしていた。

われわれも、兵庫に何としても複数の会を、そして県連を結成しよう、と決意した。上高地祭典後の西宮労山第5回総会で兵庫に700名、西宮に200名の会員を、そして県連の結成を目標に掲げた。労働組合のような部厚な議案書を大量につくり全国に郵送した。今日では多くの会で普通になっているが、それまでの山岳会では見られなかったものである。西宮労山のそれからの各方面への働きかけは熾烈を極めた。自会の拡大に取り組むとともに、少しのコネをつかむと山岳会の結成を口説いた。尼崎に、宝塚に、神戸に、そして大阪にまで働きかけた。



ついに県連を結成！

翌1966年2月にはまず尼崎労山と宝塚労山の結成に漕ぎ着けた。そして3月にはついに京都神戸に神戸労山が生まれた。これを待って四者で早速準備会をつくり、4月16日に兵庫県連を結成することに決まった。西宮労山結成後2年と6カ月である。

この頃にはお隣の大阪には、城東労山、東大阪労山など数会が生まれ、東京に次いで一足先に大阪府連を発足させていた。さすが大阪の実力である。これに次いで兵庫は3番目の県連となる。

県連結成の会場の西宮中央公民館に集まったのは4会から約50名、当時の状況を66年5月14日に発行された「労山兵庫県連 創刊号」が、当時の雰囲気をよく伝えているので紹介しよう。

『4月16日、待望の県連結成総会が行われ、遂に県連が発足しました。会場の西宮中央公民館には、尼崎・西宮・宝塚・神戸の4労山の代表約50名が集まって和やかに明るい雰囲気の中で山崎西宮副会長の司会で行われました。武原準備会会長からあいさつと「8月の第2回登山祭典までに700名の組織に」と運動方針の提案され、ついで原水準備会事務局長から、6年前に東京において「勤労者山岳会」が発足して以来の経過の報告。中村氏(神戸会長)から規約の提案、倉内氏(宝塚会長)から予算案の提案がありました。全国連盟をはじめ数多くの祝電が披露され、満場一致で諸議案が採択されました。

第2部に入っては、旧知のようにうちとけた雰囲気での交流が行われました。各会の出し物、日頃山で鍛えたノド、『キジとトイレ』まさにウンチクをかたむけた落語や、大胆な御仁の「祝砲」の一発に及んでは満場笑いこぼる始末で底抜けの明るさ、楽しさでした。ちなみに祝砲を放った「大胆な御仁」とは前県連会長の大学肇氏(現神戸ハイキングクラブ)である。

県連結成総会で選出された役員の名簿を参考までに掲げておこう。

会長～原水章行(西宮)/副会長～中村定逸(神戸)倉内司郎(宝塚)/事務局長～山崎一美(西宮)/運営委員～大学肇(神戸)木藤昭明(神戸)岡崎寛治(西宮)渡辺四郎(西宮)上温湯初(尼崎)坂井正昭・坂西美和子(宝塚)坂口禎示右(宝塚)/全国常任運営委員～武原勉(尼崎)/会計監査～後藤久宣(尼崎)土橋健二郎(神戸)

県連の結成を記念して翌4月17日には摩耶山で「記念集中登山」が行われ、各会から47名が参加した。「労山兵庫県連 創刊号」では次のように述べられている。

『奥摩耶山荘横の盆地の中央に大たき火を囲み、うたごえ・フォークダンス・ゲームを楽しみ、摩耶山は若さが一ぱい、希望も一ぱい、正に歴史的なムードである』

何しろ40年前のこと、皆若い。

県連の発展と3つの方式

県連の結成は、その後の県内の労山組織の拡大強化を進める大きなはずみをつけ、強力な原動力になった。今も変わらないが、組織を増やす有力な手段となったのが、いわゆる「根分け(分離)組織活動(働きかけ)分割」である。は少数の一部の会員が新しい会を結成すること、はつながりのある人への働きかけ、は会を対等に分割すること、で「は西宮労山が過去に盛んに行い、は新たに行った大胆な施策である。

当時の県連の4労山は緊密に連携をとりつつどの会も創造的な活動を展開、また会員と会の拡

大に真摯に取り組んだ。県連のその後の新たな発展は、多くの会がこれらの会を母体として生まれていることから明らかである。

1966年4月の結成後2年間に、東播・芦屋・姫路・甲子園と次々に会が結成され、4つの会200人から8つの会400人へと倍増した。活動も、岩登り教室、山の映画会、大山登山バス、神鍋スキーバス、六甲全山縦走大会など県連としての行事が続々と行われた。親睦をはかりながら、かつ日ごろ鍛えた成果を試そうと、12月に行われた『第1回六甲全山縦走大会』は現在も継続されているが、縦走参加者は62名、サポート20名。塩屋からスタート、高倉山も健在で、昔ながらの伝統の完全なコースであった。スケールは小さいが今に続く生き生きとしたスタートであった。むろんまだ神戸市の全縦も行われていない。

このような力を背景に、1968年7～8月には、武原勉会長(当時)がブルガリアのソフィアで開かれた第9回世界平和友好祭に全国連盟代表の一員として参加されている。

その後3方式を中心にさらに多くの会が生まれ、拡大が進み、各方面で現在につながる大きな力を発揮できるようになった。

西宮労山は1971年には会員が180名になり、山岳会としては大き過ぎて運営が大ざっぱになるといので、会を対等に2つに割り、一方を甲山労山として独立させた。いわゆる“分割”で、画期的で大胆な試みである。その後、これに倣う会も増えた。1972年には尼崎労山が武庫労山と分割、さらに1974年には神戸労山が3つの会に分割、1975年には宝塚労山が2つに分割、その後も分割により多くの会が誕生した。

私も分割の提唱者である手前、甲山労山に移った。その何年か後、私を含め2人が現在の西宮明昭山の会をつくることになる。最初に県連をつくった尼崎、宝塚、神戸などの会にも受け継がれ、その後次々と新しい会が作られた。今日県連に加盟する会の多くのルーツは、これら4つの会にたどりつくところが多い。

中高年登山者の台頭と各種ハイキングクラブの発展

1973年ごろから、各会の行う“公開ハイキング”“登山教室”や“バスハイク”にかけてなく中高年の姿が交じるようになってきた。意欲も体力も盛んな中高年パワーが台頭し始めた。それまでと比べて社会的諸条件の向上とともに、欧米からの優秀な登山用具が比較的安く手に入るようになったことも考えられる。反対に、反比例するかのように若者の登山者が減りはじめる。

1975年6月、県下の中高年ハイキングクラブ先駆けとして西宮明昭山の会が生まれた。甲山労山から2名の会員の根分けによってである。その後、1977年には夙川ハイキングクラブが結成(後に脱退)、1980年尼崎労山から尼崎



ハイキングクラブ、神戸労山から神戸ハイキングクラブ(1981年)、垂水労山から垂水ハイキングクラブ(1985年)、と続く。中高年ハイカーの増加という時代の変化を反映して山岳会からハイキングクラブの分離という新たな潮流が生まれたのである。県連が1983年に開いた「第1回主婦のためのハイキング講座」からは女性のクラブ「HCあじさい」が生まれ、その後も「HCあすなろ」「HC徒歩徒歩」が続く。これも中高年女性のハイキング熱の高まりの反映であろう。山岳会からハイキングクラブが生まれ、県連の講習会などで新しいクラブが結成され、多くのハイキングクラブが生まれた。

勤労者山岳連盟(労山)も全国に波及し、日本山岳連盟(岳連)に次いで2番目に大きい山岳団体として認知されるようになり、兵庫県連は東京に継ぐ地方組織になった。とはいえ、これまでは血縁関係の会がほとんどで、いわば同族会社のようなもの、この上の発展はもっと広く多くのグループや個人が気安く加入できるような大衆的な開かれた組織への脱皮が必要であろう。特に大型のハイキングクラブを一呑みするような間口の広さ、懐の深さが必要である。

労山運動の発展とともに、活動が多様化した。ヒマラヤを主とした海外登山、自然保護活動・公害反対運動、安全対策、教育、女性と障害者の登山、その他各分野それぞれについて述べられているとおりである。

歳月は流れ、県連結成40年、国・社会も変わったが、登山界の情勢も激しく変わった。一番の変化は、かつての若者のスポーツ登山(アルピニズム)と山岳会の時代から、主流が中高年のハイキングとハイキングクラブの時代に变化したことである。これは県連でも、各会の会員の平均年齢と志向で明らかである。

それとともにツアーリストによる商業登山が盛んになり、かつてバスハイクや集団登山はわれわれの専売特許であったが、今日ではツアーリスト、スポーツ店、交通機関、自治体などがツアーやイベントを盛んに行っている。クラブに入らなくても金さえ払えば山に(エヴェレストにさえ)行くことができるのである。一方、山からは若者の姿がめっきり減り、学校山岳会・ワンゲルは何れも衰退している。登攀の目標を失ったクライマーたちはインドアクライミングに向かい、伝統のある多くの山岳会も会員が高齢化して自然死を待つばかり。労山も人ごとではない。

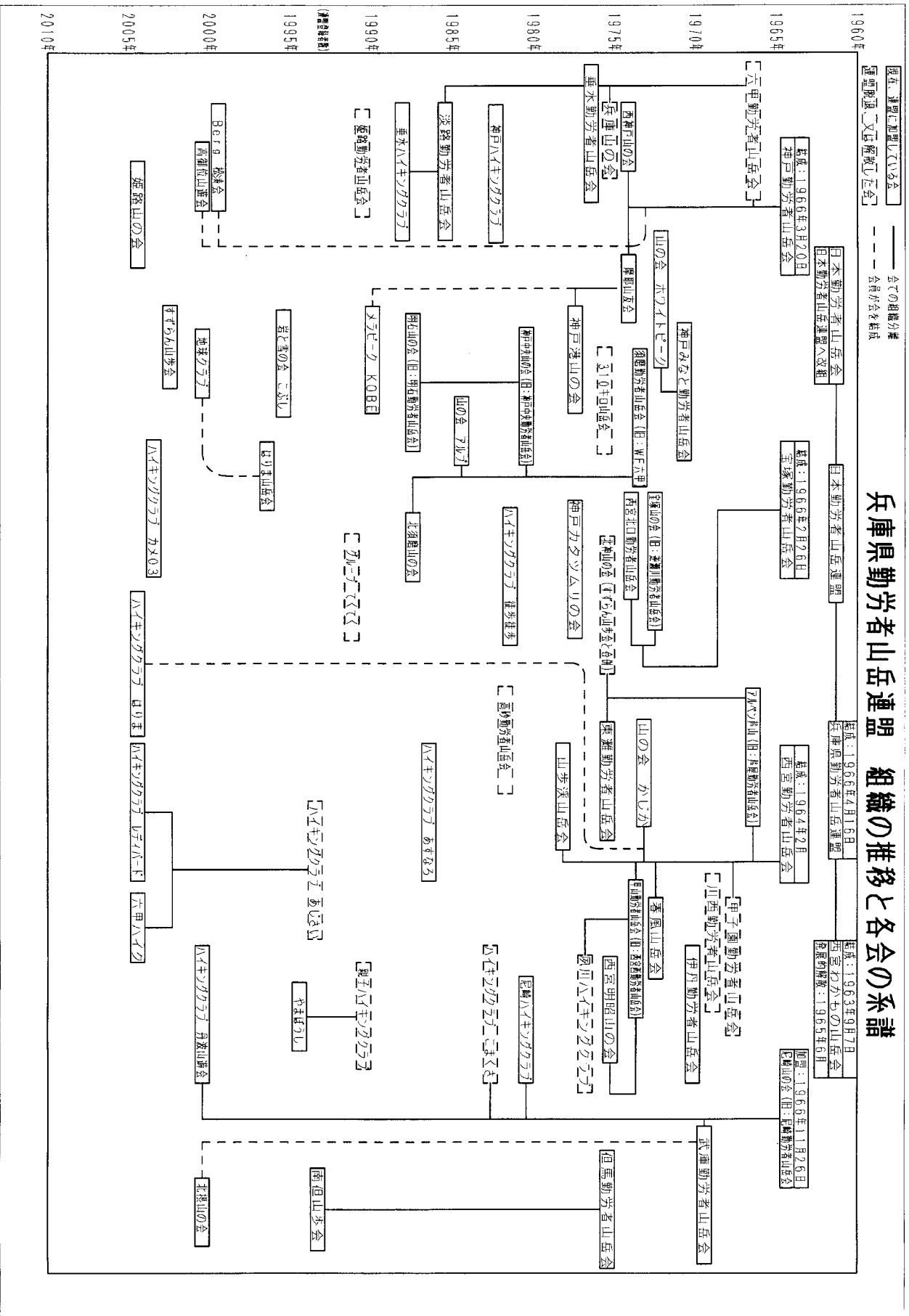
中高年登山者・ハイカーは大きく増え続け、今日では国民的なスポーツ・リクリエーションとなっている。このこと自体はすばらしいことである。しかし、初歩的な事故遭難の急増一つを見ても、い

ろいろな面で問題が大きい。青年をアルピニズムに組織し、アルピニズムの新たな発展という至難な活動と、中高年の登山愛好者を大きく組織し、山へ行く機会を保証し、教育し、中高年のハイキングを正しく発展させることが今日求められているといえよう。



組織の消長

- 400
- 400
- 450
- 470
- 506
- 577
- 719
- 1069
- 1249
- 1489
- 1577
- 1661
- 1823
- 1999
- 2133
- 2268
- 2277
- 2096
- 2195
- 2196
- 2134
- 2237
- 2276
- 2278
- 2205
- 1292 (職員総数)
- 1219
- 1394
- 1737
- 1652
- 1773
- 1793
- 1870
- 2059
- 2076
- 2116
- 2086
- 2062



兵庫県勤労者山岳連盟

40年の歩み

年	県連盟の動き	社会情勢
1960 (S35)	5.12 勤労者山岳会結成 7.11 総評が地方組織に労山結成の協力依頼	1 日米安保条約調印 三井三池闘争 9 谷川岳遭難で銃撃によるザイル切断
1961 (S36)	京都、長野はじめ全国で労山結成の動きが盛んになる	1 池田内閣 所得倍増計画 8 ベルリンの壁できる
1962 (S37)		10 キューバ封鎖 新日本婦人の会結成
1963 (S38)	7.7 日本勤労者山岳連盟結成 9.7 西宮わかもの山岳会結成	1 愛知大 薬師岳遭難 6 黒四ダム完成 第1回全国青年スポーツ祭典 11 ケネディ大統領暗殺
1964 (S39)	2 西宮わかもの山岳会、全国連盟に加盟	7 名神高速全線開通 10 東海道新幹線開業 東京オリンピック
1965 (S40)	6.26 西宮わかもの山岳会を「西宮勤労者山岳会」に改名 8.26~29 第1回全国登山祭典（上高地）	2 ベトナム北爆 11 新日本体育連盟結成 12 谷川岳遭難防止条例
1966 (S41)	2.15 尼崎勤労者山岳会結成 2.26 宝塚勤労者山岳会結成 3.20 神戸勤労者山岳会結成 4.16 兵庫県勤労者山岳連盟結成 7.31 第1回登山祭典（峰山高原） 8.4 東播勤労者山岳会結成 10.7 芦屋勤労者山岳会結成 11.4~6 第1回登山バス（大山） 12.4 第1回六甲全山縦走	2 東京都連連盟結成 大阪府連盟結成 5 中国 文化大革命 6 ビートルズ来日 8 第2回全国登山祭典 11 全国連盟第1回登山学校（富士山） 12 富山県登山届出条例
1967 (S42)	2.10~12 県連第1回スキーバス（神鍋） 3.18~21 第1回冬山学校（氷ノ山） 5.21 第2回登山祭典（六甲） 8 姫路勤労者山岳会結成 11~4 第1回県連登山学校	2 小西正継らマッターホルン北壁登記登攀 4 美濃部革新都政 8 松本深志高校西穂高で落雷による遭難 6.10 新体連兵庫県本部結成

年	県連盟の動き	社会情勢
1968 (S43)	3.19 甲子園勤労者山岳会結成（1986.4解散） 7~8 第9回世界平和友好祭（ソフィア）に武原会長参加 9.7 県連合同月見キャンプ（百丈河原） 10.19 六甲勤労者山岳会結成	1 マラソンの円谷選手 自殺 5 イタイイタイ病公害病認定 8 ソビエトのチェコ侵入 9 水俣病公害病に認定 12 3億円事件
1969 (S44)	6.22 兵庫県連「遭難対策規定」制定 9.28 春風山岳会結成 11.22 第1回学習交流集会 ~23	1 東大安田講堂占拠 5 第1回全国登山研究集会（名古屋） 7 アポロ11号人類初の月面着陸
1970 (S45)	6.4 安保学習会 12.7 兵庫県から公害をなくす市民連絡会議に加入	3 日本万国博覧会 12 公害諸法成立
1971 (S46)	1.24 登山学校「地域開発と自然破壊」「自然破壊と公害」 5 郷土の山 自然破壊総点検 7~72 六甲（17河川）水質一斉調査 年5 9~ ピーナスライン建設反対街頭署名 6.13 西宮労山分割西宮西労山（のち甲山労山）誕生 10 氷ノ山大幹線林道建設反対の声明の発表 11.29 第1回雪上技術講習会（立山） ~23 7.10~ 第3回登山研究集会（兵庫） 11	4 大阪に黒田革新府政 7 環境庁発足 8 ピーナスライン美ヶ原に反対する会結成 8 第7回全国登山祭典において、ピーナスライン反対アピール
1972 (S47)	3.9 神財労山（のち神戸みなと労山）結成 3.26、清水労山富士遭難捜索活動応援 4.9 5.21 六甲の自然を守る統一行動 5.28 高砂勤労者山岳会結成 6.3 伊丹勤労者山岳会結成 6.25 武庫労山、ブロック制を経て尼崎労山より分離独立 9.22~ 但馬の自然を守る登山大会 23 12.17 WV六甲（のち須磨労山）労山加盟	2 冬季札幌オリンピック 連合赤軍「あさま山荘事件」 4 ニクソン訪中 5 沖縄復帰 7 田中内閣 日本列島改造論 9 石津順策氏（静岡県連理事長）不当解雇 9 日中国交正常化
1973 (S48)	1.27 山の会かじか 労山加盟 2.25 氷ノ山の自然を守る会結成 3.17~ 第1回女子氷ノ山雪上技術講習会 21 5.20 第1回氷ノ山の自然を守る登山大会（第6回県登山大会）第18回（1990）まで続く 9.1 第1回女性会員のつどい 9.30 第1回公害なくせ県民大集会 10.8 県連岩登り合宿中、柳楽峰子さん（神戸労山）前穂北尾根にて滑落死	1 ベトナム和平交渉 3 水俣病裁判患者勝訴 8 金大中事件 11 オイルショック 狂乱物価



年	県連盟の動き	社会情勢
1974 (S49)	1.25 310キ口山岳会 労山に加盟 3.10 神戸労山 3分割 4.21 川西労山結成 5 明石労山 労山加盟(1982.7解散) 5.26 西神戸山の会結成(元神戸労山) 6.2 新 神戸労山結成 6.9 摩耶山友会結成 7.21 芦屋労山 淵上博さん 武庫川で水死 12.1 人権、教育 地方自治を守る県民大集会 (八鹿町)に12労山41名参加 12.5 第1期リーダー学校開校	3 第11回労山全国総会にて、総会及び全登研の隔年開催決定。「遭対基金」発足 6 国土庁発足 6 西日本活動者会議 10 第1回全国ハイキングクラブ研究交流集会 田中金脈問題 11 八鹿高校事件
1975 (S50)	1.30 第10回臨時総会 新体連加盟 10周年記念海外登山決定 4.21 川西労山結成(1982.5解散) 6.1 西宮明昭山の会結成 6 神戸港山の会、摩耶山友会より分離独立 6.8 宝塚労山 2つに分割 6.22 神戸かたつむりの会 労山加盟 6.23 東灘労山 芦屋労山より分離独立 7.13 但馬労山結成 7.15 西宮北口労山結成(元宝塚労山) 7.29 逆瀬川労山(のち宝塚山の会)結成 8.29 北神山の会結成	3 神戸市議会「核艦船入港拒否決議」 4 カンボジア解放 4.30 南ベトナム解放 5 日本女子登山隊エベレスト登頂 11 神戸市 六甲全山縦走を開催
1976 (S51)	2.28~ 第1回組織学校 3.4 3.19 第3期リーダー学校卒業山行中 奥穂口 バの耳で遭難 安田勢喜さん凍死 4人 凍傷 4.25 山歩溪山岳会 西宮労山より分離独立 4.26 六甲労山から 垂水労山が分離独立 5.12 六甲労山から 垂水労山が分離独立 6.26~ 第1回女性と登山についての全国討論集 27 会(兵庫) 7.31 兵障協 大台ヶ原登山バス 7.31~ 第1回冒険学校(1999年冬まで続く) 8.5 12.25 ネパールヒマラヤトレッキング ~1.8	2 労山全国連盟総会 趣意書(仮案)の提案 7 ロッキード事件で田中首相ら逮捕 9 米軍機横浜市内の住宅地に墜落 10 第1回全国自然保護集会



年	県連盟の動き	社会情勢
1977 (S52)	3.26～28 第1回春の冒険学校 5 山岳会ホワイトピーク みなと労山より分離独立 4～ 氷ノ山調査山行 住民意識調査 5.5 尼崎労山 上田孝男さん鹿島槍赤岩尾根で遭難 7～11 ナンダデビイ登山 11 氷ノ山保安林解除に対する意義申し立て 10.23 夙川ハイキングクラブ結成	8 原水禁世界大会14年ぶりに統一 10 わが国初の岩登り競技会(中ア宝剣岳) 11 三全総を閣議決定
1978 (S53)	2.11 第13回全国連盟総会で新趣意書決定 10.22 六甲からゴミを一掃する運動スタート(8月を除く 毎月1回 清掃登山)	3 滋賀山友会 五竜岳で遭難 4人死亡 5 国連軍縮特別総会
1979 (S54)	7～9 女子登山隊 CB12登頂 8.17 倉内氏への不当な懲戒処分の実態を知り、その不服申立を支援する集会 9 淡路労山結成 11 姫路労山再建	3 スリーマイル島原発事故 4 東京。大阪で保守知事 9 大杉谷吊り橋切断事故 12 ソ連アフガニスタン介入
1980 (S55)	1 ロックガーデン階段化反対運動 5～6 シブリン登頂 5.18 尼崎ハイキングクラブ結成 9.6 神戸中央労山 須磨労山から分離独立	1 社公連合政権構想 モスクワオリンピックボイコット 8 ポーランド、自主労組設立
1981 (S56)	5.16 神戸ハイキングクラブ結成 6.29 ロックガーデン階段化反対署名(16万人)環境庁長官に渡す 8 グリーンパトロール アカゲラ 労山加盟(82年4月脱会) 12.19 親子ハイキングクラブ結成 12 芦谷川の自然を守る活動はじまる	3 第2臨調発足 5 ミニヤコンカで8人遭難死
1982 (S57)	1.23 北神戸の自然と文化を守る会結成 芦谷川を守る運動 3.21 神戸みなと労山 八ヶ岳で雪崩遭難(11人死亡) 山行自粛と遭難防止の論議 5.2 須磨労山 チュールウエスト峰6630m)登頂 11.31 日ネ合同登山隊 キャリオルン峰(6681m)初登頂 11 兵庫山の会 解散	5 国連ナイロビ環境会議 6 第2回国連軍縮特別会議 7 第2臨調基本答申 11 中曽根内閣発足 12 全民労協結成

年	県連盟の動き	社会情勢
1983 (S58)	2.18 ナンダデビイ登山隊の倉内司郎氏に対する懲戒処分の修正裁定 3.8 芦谷川の自然を守る署名5万8千名分を神戸市に提出 4.3 第1回六甲山タイムトライアル 8.15 五竜遠見尾根で西宮労山の辻宗郎さん転落死 10.2 第1回各会対抗駅伝大会 10~ 第1回主婦のためのハイキング講座 10.22 遭難を考える夕べ	3 第二次臨調最終答申 4 東京ディズニーランド開園 5 布引公園ロープウエイ構想 9 大韓航空機撃墜事件 10 ロッキード事件田中（元首相）有罪判決 12 安本訴訟判決 大杉谷吊り橋切断事故の判決
1984 (S59)	1.29 山の会アルプ、須磨労山から分離独立 4~6 ジュニアリーダー講座 7 神戸みなと労山、会員17名で平和行進の県内通し行進を達成 8.11 西宮北口労山の黒田正さん、南ア赤石沢で転落死 9.30 甲山労山の森井祖一さん、東六甲縦走路で転倒、心不全により死亡。 10.11 シブリン登山隊井上孝之氏に対する懲戒処分の修正裁定（戒告処分）	2 植村直己、マッキンリーで消息を絶つ 3 グリコ森永事件 7 ロスアンゼルス五輪への参加、ソ連東欧諸国ボイコット 10 健康保険法改悪（本人1割負担）
1985 (S60)	1.1 宝塚山の会、鹿島槍で遭難（4名全員死亡） 9月まで捜索活動 5.10~11 組織交流会 6.8 第1回兵庫の山々清掃登山（対象を六甲から県内に広げる） 7.4 垂水ハイキングクラブ、垂水労山から分離 7 平和行進に連盟として初参加 7.26~29 視力障害者富士登山 10.8 インド・ケダルナート峰で須磨労山の斉藤茂樹さん、雪崩に巻き込まれて遭難	3 ソ連ゴルバチョフ書記長就任 科学万博（つくば博）開幕 4 NTT、JT発足 8 日航ジャンボ機墜落事故
1986 (S61)	2 グループてくてく結成（1989.1脱退） 2~4 第1回労山学校 4~5 第1回ハイキングリーダー講座 5.11 山の会こまくさ結成（1992.1脱退） 8.30~31 肢体障害者登山、峰山高原 11 ハイキングクラブあすなる労山加盟 12.31 神戸労山の河村邦彦さん、西穂高岳独標付近で遭難、疲労凍死	1 スペースシャトル発射直後に爆発 4 男女雇用機会均等法施行 ソ連チェルノブイリ原発事故 5 氷ノ山に多田ケルン 7 43号線道路公害判決 11 伊豆大島三原山噴火 12 余部鉄橋列車転落事故

年	県連盟の動き	社会情勢
1987 (S62)	2.19 神戸市議会へ裏六甲カントリーゴルフ場建設反対の陳情（屏風谷の自然を守る活動） 4.26 須磨労山から北須磨山の会分離独立 10 県連事務所、芦屋から神戸（琴ノ緒町）へ移転 11.25 神戸市、布引公園整備とロープウェイ建設計画発表（12.3白紙撤回を申し入れ） 12 明石労山結成	4 国鉄分割民営化 6 リゾート法施行 9 北ア屏風岩で岩崩れ 11 「連合」発足
1988 (S63)	10.2 布引・市ヶ原の自然を守る会を結成 10.21 六甲からごみを一扫する運動10周年記念集会 12 視力障害者登山、4回に分けて六甲全縦 12.13 アマチュア無線クラブ局開局	5 日・中・ネ合同チョモランマ登山、テレビ中継 6 ブナと原生林・現代文明を考える全国集会（第1回ブナ集会） 9 ソウルオリンピック 10 広域基幹林道「氷ノ山線」開通
1989 (H1)	2.5 布引公園問題で中央区全戸ビラ配布 2.26 神戸の自然を考えるシンポジウム 4.15～16 全国ハイキング活動者会議（兵庫） 5.14 「布引公園」工事抗議集会 5.28 岩登り技術研修会 7～8 全国連盟第2回高所登山学校 ハンテングリ峰（7,010m）登頂（山歩溪山岳会・西村牧代さん）	1 昭和天皇崩御 4 消費税導入（3%） 6 中国天安門事件 10 立山で中高年者遭難（死者8名） 11 ベルリンの壁崩壊
1990 (H2)	1.27～28 第8回女性会員の集い「田部井純子氏講演」 5.19～20 第18回氷ノ山の自然を守る登山大会（最終） 9～10 連盟創立25周年記念海外登山 ガンゴトリ 峰登頂 10.7 六甲山系の自然を考えるパネルディスカッション 12.6 「オリンピックと自然保護」講演会（和田蔵次氏）	1 木島長崎市長銃撃事件 4 長野五輪、岩管山滑降コース断念 4～9 大阪で「花の万博」 7 山野井泰史、南米パタゴニア・フィッツロイ冬季単独初登頂 10 バブル崩壊
1991 (H3)	2 第1回雪山ハイキング講座 4.13 連盟結成25周年記念レセプション 4.16 メラピークKOBEL 労山加盟 5.18～19 第1回兵庫の山々一斉登山 6.7 ハイキングクラブ徒歩徒歩、結成 8～9 神戸中央労山ムルキラ峰登頂 9～10 メラピークKOBEL、メラピーク登頂	1 湾岸戦争勃発 5 信楽高原鉄道列車事故 10 長谷川恒男らウルタル 峰で遭難 J I A Aワールドカップ東京大会 12 ゴルバチョフ大統領就任、ソビエト連邦解体

年	県連盟の動き	社会情勢
1992 (H4)	1 第1回アマチュア無線士受験講座 3 RC研究会 10 ゴルフ場問題意見広告に参加 11 三俣山荘撤去命令を撤回させる運動	7 P K O協力法による自衛隊海外派遣 バルセロナオリンピック 9 毛利衛さんスペースシャトルで宇宙へ 12 気圧の単位「ミリバール」から「ヘクトパスカル」へ
1993 (H5)	3.14 組織担当者交流集会 4.3 近畿ブロック搬出法講習会 7 平和行進大学会長が県内通し行進「兵庫労山」毎月定期発行に 9.18 各会リーダー交流会 10.3 六甲山からゴミを一掃する運動15周年記念集会	3 六甲山頂 米軍より返還 7 北海道西南沖地震、奥尻島で死者181名 8 細川連立内閣誕生 12 屋久島、白神山地が世界遺産に登録 群馬山岳連盟隊、厳冬期のエベレスト南西壁から登頂
1994 (H6)	1.14～16 第1回近畿ブロック雪崩講習会 3.14 組織担当者交流会 5.28～29 救急法搬出法講習会 6.12 無線委員会設置 7 RC研究会、ヨセミテクライミング 8.14 明石労山、野口浩二さん扇ノ山で遭難 9～10 メラピークK O B E、トウクチェピーク登頂	6 松本サリン事件 村山連立内閣誕生 9 関西国際空港開港 10 大江健三郎氏にノーベル文学賞
1995 (H7)	1～ 震災により殆どの活動が休止状態に（会員3名死亡、18会が事務所を失う） 2.12 岩と雪の会こぶし結成 2.19 各会代表者会議で被災状況把握（全国連盟役員出席） 3～ 六甲山系40コースの登山道点検活動タイムトライアル中止 4.2 「兵庫労山」発行再開（2・3月号休刊） 5.8 被災市と兵庫県に登山道点検結果に基づき整備の要望と義捐金を渡す 5.14 六甲山からゴミを一掃する活動再開（2月～4月は休止） 7.1 兵庫労山救助隊発足 10.21 氷ノ山一斉登山 ～22 12.3 第30回六甲全縦（東コースを追加）	1.17 阪神・淡路大震災 3 地下鉄サリン事件 4 統一地方選挙で青島東京都知事、横山ノック大阪府知事が誕生 5 中国が地下核実験 9 沖縄兵による小学女児暴行事件 フランスムルロア環礁で地下核実験 11 ネパールで大量雪崩遭難 沖縄大田知事代理署名を拒否

年	県連盟の動き	社会情勢
1996 (H8)	3 第14回タイムトライアル(最終) 4.1 はりま山岳会結成 4~8 第1回中級ハイキングリーダー講座 4.14 連盟創立30周年記念レセプション 9.2 六甲山登山道再調査	2 菅直人厚相が薬害エイズ問題で謝罪 7 アトランタオリンピック 9 小西正継マナスルで遭難 12 広島原爆ドーム、厳島神社が世界遺産に ペルー日本大使公邸人質事件
1997 (H9)	1.26 淡路労山3名と南但山歩会2名のパーティー、氷ノ山で遭難 4.25 兵庫視力障害者の生活と権利を守る会結成30周年記念・三瓶山登山 10.10 明昭山の会の溝淵和彦さんが金剛山で心筋梗塞により死亡 12.7 第32回六甲全縦(西コースも追加)	1 ナホトカ号、石油流失事故 4 消費税率が5%に 農水省諫早湾干拓地の堤防封鎖強行 12 介護保険法成立 地球温暖化防止京都会議
1998 (H10)	3~ 六甲山系に植樹活動 (クリーン&グリーン作戦) 5.19 多田繁次さん死亡(92歳) 6~ 六甲山系河川水質調査(~99年3月) 6~11 中級ロッククライミングスクール 9~10 はりま山岳会ほか、中国四川省連花夕照連山登山 9.16 「武庫川ダム建設中止を求める要望書」県知事に提出 10.4 ゴミ一掃20周年記念集会 兵庫県知事表彰「くすのき賞」受賞 10.31 全国自然保護集会六甲集会	2 冬季オリンピック長野大会 3 キトラ古墳石室星宿図発見 5 全国連盟チョモランマ登山(8名) インドとパキスタンが地下核実験 サッカーくじ法成立 7 和歌山カレー毒物混入事件 8 上高地で群発地震 北朝鮮のテポドン三陸沖に着弾
1999 (H11)	5.9・ 第1回武庫川渓谷清掃 6.6 6.13 規約改正(大型会の連盟費軽減) 7~ 第1回インドクライミングスクール 10.1 B E R G松涛会加盟 11.6 西日本女性交流集会99 IN MY R O K K O	3 オリンピック招致不正疑惑 7 N T T分割 8 国旗・国歌法成立 玄倉川でキャンパー遭難(死者13人)
2000 (H12)	2 武庫川ダム環境アセスメントに意見書提出 3.13 全国連盟吉尾弘会長が谷川岳一ノ倉沢で遭難 4~ 武庫川ダム建設中止を求める署名活動開始 6.10 ハイキングクラブ丹波山遊会結成 9.2 北摂山の会結成 10.8 高御位山遊会結成 11~ 六甲山系湧き水調査 11.19 新スポ連クライミングコンペ全国大会(兵庫労山主管)	3 文部省登山研究所の冬山研修(大日岳)で雪庇崩壊により2学生遭難 4 介護保険制度スタート 7 三宅島雄山噴火 10 旧石器発掘捏造事件

年	県連盟の動き	社会情勢
2001 (H13)	1 「兵庫労山のしおり」作成 2~ ゴミ一掃活動を年11回から6回に変更 3~4 武庫川県民ウォーク（源流から河口まで） 7 武庫川円卓会議を結成 10.27 西日本視覚障害者交流登山（船上山） ~28 11.27 女性委員会「谷口凱夫氏講演会」	2 ハワイ沖えひめ丸原潜衝突事故 4 小泉内閣誕生 9 国内初の狂牛病認定 アメリカ同時多発テロ 10 米英軍アフガニスタンで空爆
2002 (H14)	3.22 神戸カタツムリの会、江藤敏行さん 五竜岳で一酸化炭素中毒死 4.20 自然保護委員会「小泉武栄氏講演会」 6 インターネット委員会発足 7.13 西神戸山の会の林文夫さん、愛知川で溺死 9.1 円卓会議「武庫川シンポジウム」 9~ 第1回ハイキングリーダー学校	1 雪印牛肉偽装事件 4 家電リサイクル法施行 7 富士山エコフォーラム 9 日朝首脳会談 10 北朝鮮拉致被害者5人帰国
2003 (H15)	1.19 県連交流集会（33会140名） 4 すずらん山歩会結成 6.8 新スポ県連盟加盟を解消し、協賛団体となる 6 視力障害者の会「ハイキング・カメ03」結成 10.5 ゴミ一掃25周年摩耶山頂集会 11.8 女性委員会「山野井妙子氏講演会」 12.15 武庫川ダム建設反対署名5万名を県へ提出	3 米英軍がイラク攻撃開始 7 九州地方集中豪雨 宮城地震 9 十勝沖地震 11 イラクで日本人外交官殺害
2004 (H16)	1.24 大日岳訴訟支援労山の会結成 2.1 ハイキングクラブはりま加盟 3.9 旧HCあじさいから「六甲ハイク」分離独立 4.1 マイクロバス一括手配事業スタート 4.6 旧HCあじさいの解散により「ハイキングクラブ・レディーバード」結成 5.23 メラピークKOB E横山琴美さん、県連中級RCS不動岩で転落死 7.28 ゴミ一掃活動で環境大臣賞受賞 9.18~ 諫早湾・普賢岳へ、長崎労山と交流 19 11.29 組織交流会「会の悩み、徹底討論」	1 鳥インフルエンザ感染発覚 2 イラクへ陸上自衛隊派遣 10 新潟中越地震 12 インド洋大津波
2005 (H17)	3.12 播磨地区労山地域別交流会 4.24 西宮労山、土屋孝右衛さん富士山で滑落死 11.26 女性部会「渡邊玉枝さん講演会」	4 JR宝塚線脱線事故 8 全国連盟隊ガッシャブルム 峰登頂

年	県連盟の動き	社会情勢
2006 (H18)	2~3 運営委員会要請セミナー開催	1 ライブドア・ショック
	3.23 40周年記念植樹「労山の森づくり」	6 北朝鮮がミサイル発射
	5.27~ 40周年記念「氷ノ山集中登山記念集 28 会」	7 陸上自衛隊イラクから撤収
	7.16 山歩溪山岳会の牧逸生さん、比良口ノ深 谷で転落死	
	9.24 40周年記念集会（記念講演「鹿屋体育 大学教授 山本正嘉氏」、記念式典、懇 親会」	
	10.8 垂水労山の安田尚代さん、前穂高岳で疲 労凍死	
	11.6 登山事故防止に関する非常事態宣言 ~07.5事故防止のための代表者会議（5 回）	
	11.11 40周年記念「氷ノ山集中登山記念集 ~12 会」分野別交流会&集中ハイキング」	
	11.26 武庫労山の井上比香子さん、六甲西山谷 で転落死	



兵庫県連盟歴代役員一覧表

回数	西暦	和暦	月日	会長	副会長	理事長	事務局長
1	1966	S41	4/16	原水章行	中村定逸、倉内司郎	-	山崎一美
2	1967	S42	3/15・28	武原 勉	中村定逸、倉内司郎	-	原水章行
3	1968	S43	4/21	武原 勉	笠井 大、倉内司郎	-	原水章行
4	1969	S44	6/22	倉内司郎	笠井 大、武原 勉、原水章行	-	金田幸三
5	1970	S45	6/28	武原 勉	大学 肇、田淵創生、原水章行	倉内司郎	武藤鞆美
6	1971	S46	10/31	武原 勉	大学 肇、田淵創生、原水章行	倉内司郎	武藤鞆美
7	1972	S47	10/22	武原 勉	大学 肇、田淵創生、原水章行、金田幸三	倉内司郎	武藤鞆美
8	1973	S48	10/28	武原 勉	大学 肇、田淵創生、原水章行、金田幸三	倉内司郎	武藤鞆美
9	1974	S49	10/26・27	武原 勉	大学 肇、田淵創生、原水章行、金田幸三	倉内司郎	武藤鞆美
	1975	S50	1/30	武原 勉	大学 肇、田淵創生、原水章行	倉内司郎	武藤鞆美
11	1975	S50	11/8	武原 勉	大学 肇、田淵創生、原水章行	倉内司郎	武藤鞆美
12	1976	S51	11/6・7	武原 勉	大学 肇、田淵創生、原水章行	倉内司郎	武藤鞆美
13	1978	S53	6/17・18	大学 肇	田淵創生、原水章行	倉内司郎	武藤鞆美
14	1979	S54	6/16・17	大学 肇	田淵創生、原水章行	倉内司郎	玉井進吾郎
15	1980	S55	8/30・31	大学 肇	田淵創生、原水章行	倉内司郎	玉井進吾郎
	1980	S55	11/14・15	大学 肇	田淵創生、原水章行	倉内司郎	玉井進吾郎
17	1981	S56	6/20・21	大学 肇	田淵創生、原水章行	倉内司郎	玉井進吾郎
	1982	S57	3/15	大学 肇	田淵創生、原水章行	倉内司郎	玉井進吾郎
19	1982	S57	6/12・13	大学 肇	田淵創生、熊田 正	倉内司郎	玉井進吾郎
20	1983	S58	6/11・12	大学 肇	田淵創生、熊田 正	玉井進吾郎	井上幸隆
21	1984	S59	6/9・10	大学 肇	田淵創生、熊田 正	玉井進吾郎	井上幸隆
22	1985	S60	6/15・16	大学 肇	田淵創生、小山睦男、三宅静夫、森本晴夫	玉井進吾郎	井上幸隆
23	1986	S61	6/14・15	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、森本晴夫、久保富三夫	玉井進吾郎	井上幸隆
24	1987	S62	6/13・14	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、森本晴夫、久保富三夫	玉井進吾郎	井上幸隆
25	1988	S63	6/11・12	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、森本晴夫、久保富三夫	玉井進吾郎	阪本千佳子
26	1989	H1	6/10・11	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、久保富三夫、原水章行	玉井進吾郎	阪本千佳子
27	1990	H2	6/9・10	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、久保富三夫、原水章行	玉井進吾郎	阪本千佳子
28	1991	H3	6/8・9	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、久保富三夫、原水章行	清郷雅秋	阪本千佳子
29	1992	H4	6/13・14	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、久保富三夫、原水章行、玉井進吾郎	清郷雅秋	中井 護
30	1993	H5	6/12・13	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、久保富三夫、原水章行、玉井進吾郎	西村牧代	中井 護
31	1994	H6	6/11・12	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、玉井進吾郎	西村牧代	中井 護
32	1995	H7	6/18	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、玉井進吾郎	西村牧代	中井 護
33	1996	H8	6/9	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、玉井進吾郎	喜多伸介	中井 護
34	1997	H9	6/8	大学 肇	小山睦男、三宅静夫、玉井進吾郎、森浜牧代	喜多伸介	中井 護
35	1998	H10	6/14	大学 肇	玉井進吾郎、森浜牧代、井上幸隆	喜多伸介	鬼塚孝二
36	1999	H11	6/13	大学 肇	玉井進吾郎、森浜牧代、井上幸隆	喜多伸介	鬼塚孝二
37	2000	H12	6/11	大学 肇	玉井進吾郎、森浜牧代、井上幸隆	喜多伸介	鬼塚孝二
38	2001	H13	6/10	大学 肇	玉井進吾郎、森浜牧代、井上幸隆	喜多伸介	中井 護
39	2002	H14	6/9	大学 肇	玉井進吾郎、井上幸隆、中井 護	喜多伸介	阿部順一郎
40	2003	H15	6/8	大学 肇	玉井進吾郎、井上幸隆、中井 護	喜多伸介	阿部順一郎
41	2004	H16	6/13	大学 肇	玉井進吾郎、井上幸隆、中井 護	喜多伸介	阿部順一郎
42	2005	H17	6/12	玉井進吾郎	井上幸隆、中井 護	喜多伸介	阿部順一郎
43	2006	H18	6/11	玉井進吾郎	中井 護、村上悦朗	喜多伸介	阿部順一郎

注： は臨時大会

加盟山岳会一覧表

2006年6月

会番号	会名	創立年月日	会員数		
			男性	女性	合計
01	西宮勤労者山岳会	1963/9/7	32名	32名	64名
02	尼崎山の会	1966/2/14	11名	0名	11名
03	神戸勤労者山岳会	1966/3/20	42名	26名	68名
04	アルペン芦山	1966/10	41名	27名	68名
05	須磨勤労者山岳会	1968	17名	22名	39名
06	神戸カタツムリの会	1968/1/9	46名	72名	118名
07	春風山岳会	1969/9/28	7名	4名	11名
08	甲山勤労者山岳会	1971/6/13	28名	27名	55名
09	山の会 かじか	1972/1/25	55名	72名	127名
10	神戸みなと勤労者山岳会	1972/3/9	18名	9名	27名
11	武庫勤労者山岳会	1972/6/25			90名
12	伊丹勤労者山岳会	1972/6/10	27名	21名	48名
13	西神戸山の会	1974/5/26	39名	39名	78名
14	山岳会 ホワイトピーク	1977/5	4名	5名	9名
15	摩耶山友会	1974/6/9	64名	47名	111名
16	西宮明昭山の会	1975/6/1	279名	401名	680名
18	東灘勤労者山岳会	1975/6	10名	7名	17名
19	但馬勤労者山岳会	1975/7/13	4名	3名	7名
20	西宮北口勤労者山岳会	1975/7/15	9名	17名	26名
22	垂水勤労者山岳会	1976/4/26	22名	33名	55名
23	神戸港山の会	1976/6	31名	29名	60名
24	宝塚山の会	1975/7/29	22名	21名	43名
25	山歩溪山岳会	1976/4/25	60名	43名	103名
26	淡路勤労者山岳会	1979/9	2名	2名	4名
27	尼崎ハイキングクラブ	1980/5	35名	40名	75名
28	神戸中央山の会	1980/9/6	65名	40名	105名
29	神戸ハイキングクラブ	1981/5/16	19名	18名	37名
30	山の会 アルプ	1984/1/29	25名	28名	53名
31	南但山歩会		5名	2名	7名
32	垂水ハイキングクラブ	1985/7/4	10名	9名	19名
33	ハイキングクラブ あすなる	1986/1/24	0名	15名	15名
34	北須磨山の会	1987/4/26	7名	15名	22名
35	明石山の会	1987/12/12	21名	22名	43名
36	メラ・ピーク KOBE	1991/4	9名	2名	11名
37	ハイキングクラブ 徒歩徒歩	1991/6/7	0名	11名	11名
38	やまぼうし	1993/12/12	2名	21名	23名
39	岩と雪の会 こぶし	1995/2/12	13名	3名	16名
40	はりま山岳会	1996/4/1	24名	5名	29名
41	Berg 松涛会	1999/10/1	3名	6名	9名
42	ハイキングクラブ 丹波山遊会	2000/6/10	1名	1名	2名
43	北摂山の会	2000/9/2	25名	13名	38名
44	地球クラブ		1名	1名	2名
45	高御位山遊会	2000/10/8	27名	15名	42名
46	すずらん山歩会	2003/4	1名	4名	5名
47	ハイキングクラブ カメ03	2003/6	10名	11名	21名
48	ハイキングクラブ はりま	2003/8/1	19名	21名	40名
49	六甲ハイク	2004/3/9	0名	17名	17名
50	ハイキングクラブ レディバード	2004/4/6	0名	23名	23名
51	姫路山の会	2004/11/14	22名	14名	36名

終りに(編集後記)

兵庫労山創立40周年記念誌の作成は1年前の第43回定期総会後に開始されましたが、必死になり出したのは今年に入ってからでした。事務所移転や震災により、資料は散逸、事務所の書類も未整理であったため、各編集委員は記録を捜し出し、数字をあたるのに非常に苦労しました。という訳で数字等に間違いがあるかもしれませんがお許し下さい。

結局、常任理事をはじめ、当時の担当者に協力をいただきました。各会の皆様にもアンケート等でお世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今回の記念誌の作成にあたっては「過去を記録するだけでなく、未来に生かせるものを」との考えから編集し、電子データ化にもつとめました。

この40周年記念誌がこれと一緒に作る電子データ(PDF等)とともに、これからの兵庫労山・各会で十分活用されることを期待しております。

1970年5月

兵庫県勤労者山岳連盟創立40周年記念誌編集委員会

委員長 安留 紘一(甲山勤労者山岳山)
委員 原水 章行(西宮明和山の会)
委員 玉井進吾郎(メラピークKOBÉ)
委員 村上 悦郎(神戸中央山の会)
委員 寺内 進(西神戸山の会)
委員 田中 朋茂(神戸みなと勤労者山岳会)
委員 坂西美和子(西宮北口勤労者山岳会)
委員 玉木 光男(山の会かじか)
委員 南 哲哉(淡路勤労者山岳会)

ご協力いただいた方々

喜多 伸介(伊丹勤労者山岳会)
西村 牧代(山歩溪山岳会)
中井 護(摩耶山友会)
阿部順一郎(垂水勤労者山岳会)



発行 2007年6月 兵庫県勤労者山岳連盟

〒651-0095

神戸市中央区旭通3丁目4-12

前田ビル4F

TEL (078)222-2463

FAX (078)222-2109

<http://www.nextftp.com/hyogo-rousan/>

Mail:hyogo-waf@d4.dion.ne.jp